

334.4225

M494m

民国十七年の満州出稼者

国立国会図書館



* 0025129000 *

0025129-000

334.4225-M494m

民国十七年の満洲出稼者

南満洲鉄道株式会社庶務部調査課・編

南満洲鉄道

1929

ADE

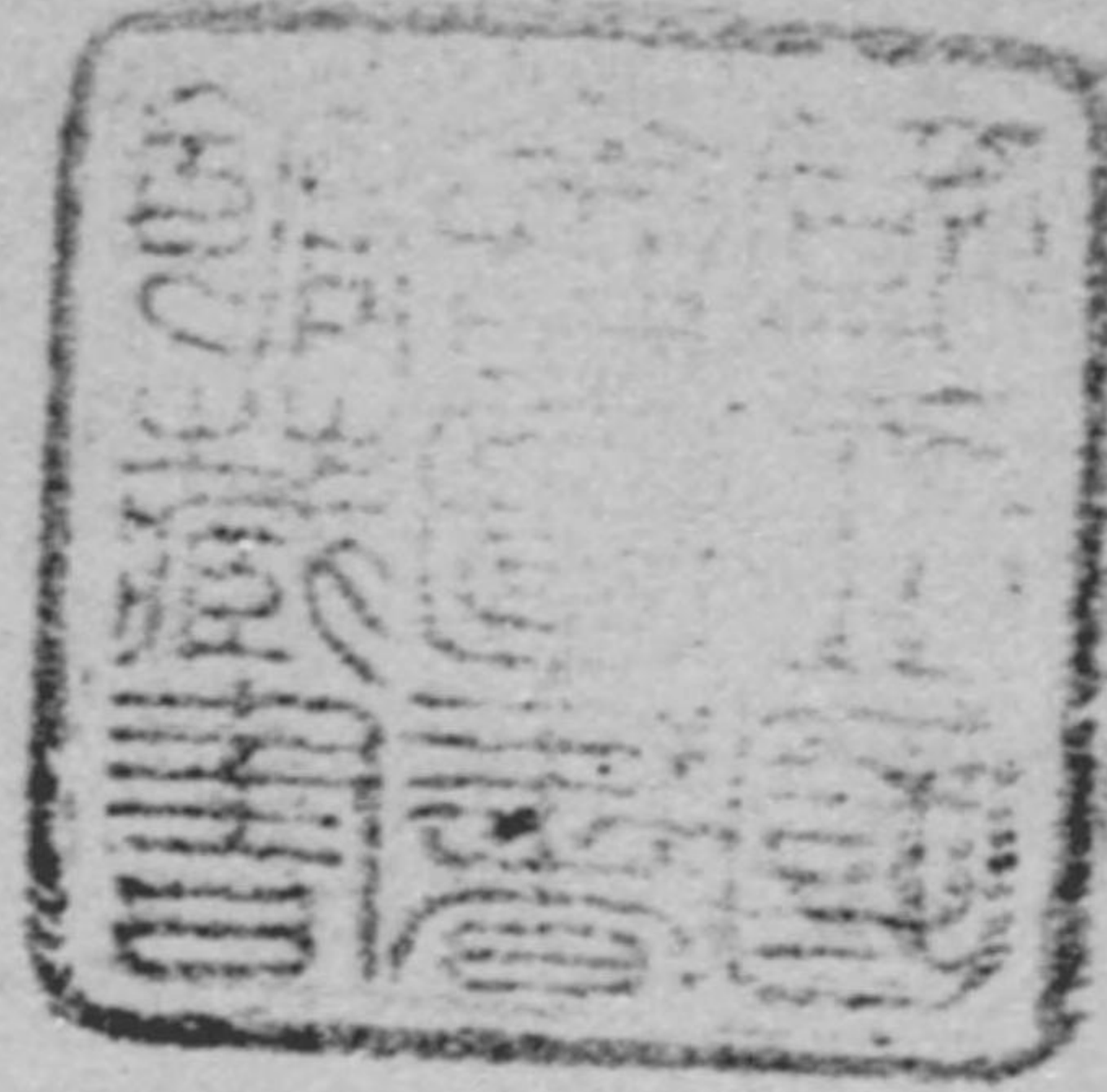
エト2E-64

滿鐵調査資料第百編

民國十七年の滿洲出稼者

南滿洲鐵道株式會社
庶務部調査課

334.4225
M499m



113279

凡例

- 一、本書は民國十七年一月より六月末に至る半年間に滿洲に入込んだ山東、直隸出稼人の調査にして、前年度編同様苦力許りでなく避難民、農業移民等の一切を含むも、所謂出稼苦力なるもの、全般に關する基本調査ではない。
- 二、書中前年度編を稱するは滿鐵調査資料第七十編「民國十六年の滿洲出稼者」のこゝにして、前年を云ひ、本年をいふは昭和二年昭和三年を指す。
- 三、本編の材料は在滿各地領事館、當社地方機關の情報並に報告にして、前年度編との比較並に出張調査を爲さざる關係上其の調整の基本は總て前年度編に置いた。
- 四、前年度に於ける移民の著増は本年に於いて難民救護並に招致に就いて地方官憲及山東同鄉會等の一段活躍を促せる模様あり多少の變化を見たりと思はれるが、蒐集資料中には集録に値するものなきが故に之を省略せざるを得なかつた。朝鮮人壓迫問題も可成り喧しかつたが各地の報告は總べて前年同様なりし爲之も省略するこゝにした。

一、此の稿を終らんごするに當り再び出稼者の連日埠頭に上陸するもの數千人を算し、洪水の如く港橋より市内に溢れ来るの狀況を目前に見せられた。時恰も張宗昌の旗擧一致し避難民的色彩の濃厚なるものあるが如く見ら

れたが中には雪除けの道具さへ携帯するものありて計畫的移動と思はれる節が多かつた。之等の事情に依つて想像するに、永年に互る直魯兩省内に於ける種々の生活に對する脅威は彼等住民をして不慮の災に遭遇しても直に移動し得るだけの準備を不斷に爲さしめ居るもの、如く思はれる。故に今後は出稼者數の多少に拘らず、其の重要性は一時的現象としての觀察よりも基本的觀察を爲すに在る。

一、而も斯の如き基本的調査は既往に於ける研究の乏しきこと、現在に於ても正確なる統計資料の得られざりしこと等に依り極めて困難なることが感ぜられる、本書不完全ながら又之が一助ともなり得るならば望外の幸である。

一、擔當者 栗本豊

昭和四年四月

庶務部調査課

民國十七年の滿洲出稼者

第一章 民國十七年滿洲出稼者概況……………一

第二章 滿洲への出稼者數……………三

第一節 總數……………三

第二節 徑路別入滿數……………四

第一項 大連上陸數……………四

第二項 營口上陸數……………五

第三項 安東上陸數……………七

第四項 京奉線關係……………八

(一) 京奉線奉天驛下車數……………八

(二) 皇姑屯驛下車數……………九

(三) 京奉沿線徒歩者数.....九

第三節 例年との比較.....九

第三章 滿鐵線主要驛分布状態.....二

第一節 總説.....一二

第一項 大連及營口兩驛發貨車輸送数.....一三

第二項 奉天、安東、大連、營口よりの三等乗客数.....一六

第三項 大連、營口發貨車輸送者及奉天、安東發三等客の分布状態.....二〇

第四項 徒歩者数.....二一

第二節 各地狀況.....二二

第一款 大連.....二二

第二款 營口.....二二
一、上陸者總数 二、營口、安東及京奉線との比較 三、貨車輸送者の主要驛分布状態 四、貨車輸送数の上陸者に對する割合 五、出稼者の仕出港別比較 六、歸還苦力狀況

第二款 營口.....三四

一、上陸者總数 二、上陸者の仕出港別比較 三、大連、安東及京奉線との比較 四、貨車輸送に依る重要驛分布状態 五、貨車輸送数の上陸者に對する比率 六、歸還苦力狀況

第三款 安東.....四三

一、上陸者總数と仕出港 二、貨車輸送に由る主要驛分布狀況 三、上陸者と汽車に依る北行者との關係

第四款 奉天.....四八

一、貨車輸送数 二、京奉線に依る出稼者 三、奉天驛發奥地出稼者の分布状態 四、客車に依る出稼者数 五、歸還苦力の奉天驛下車数

第五款 撫順.....五七

第六款 長春.....五八

一、長春到着数 二、到着者の奥地分布状態 三、鐵道による出稼人の長春下車の割合 四、出稼者の生業状態 五、長春貧民救濟會の救濟員数 六、長春驛發歸還華工数

第四章 奥地分布状態.....六六

第一節 南 滿……………六九

第一款 總 數……………六九

第二款 分布狀況……………六九

第一項 奉海鐵道及開拓鐵道背後地方……………七〇

一、奉海鐵道利用者 二、分布狀況 三、奉海鐵路運輸直魯雜民免費辦法 四、開拓鐵道利用者及分布狀況

第二項 四洮、洮昂沿線地方……………七六

一、四平街よりの乗車數 二、打通線に依るもの 三、洮昂路發運難民辦法 四、蒙倫山大の

開墾計畫

第三項 京奉沿線及其背後地……………八一

一、新民府 二、赤峯地方 三、開魯地方

第四項 長春西方及西北方地方……………八二

第五項 吉長、吉敦沿線及背後地方……………八三

一、分布狀況 二、到著總數 三、吉林地方出稼狀況 四、敦化地方出稼狀況

第六項 鴨綠江流域地帯……………八八

第二節 北 滿……………八九

第一款 總 數……………八九

第二款 分布狀況……………九〇

第一項 東部沿線及其背後地方……………九五

第二項 東支西部線及其背後地方……………九七

第三項 松花江下流及黑龍江地方……………一〇〇

第四項 呼海沿線及背後地方……………一〇一

第五章 歸還者數と移民の定著力……………一〇四

第一 最近數年間の歸還數と定著者……………一〇五

第二 昭和三年度移住數……………一〇八

第六章 移民の増加と地方開拓狀況……………一一〇

第一 南滿地方開拓狀況……………一一三

第二 北滿地方開拓状況……………一四

第七章 山東直隸出稼事情……………一九

第一節 出稼者増加の原因……………二〇

第一項 戰禍……………二〇

第二項 匪禍……………二二

第三項 稅禍……………二四

第四項 天災……………二五

第五項 銅元の下落……………三〇

第二節 窮民の救濟方法及滿洲出稼者の獎勵……………三一

第一款 窮民の救濟方法……………三一

一、農民粥廠 二、窮民庇廕所 三、義捐金の募集 四、糧食買入及寄附

第二款 滿洲出稼の獎勵……………三六

第三節 膠濟、津浦兩鐵路其他の出稼者取扱……………三八

第一款 膠濟鐵路の出稼者取扱……………三八

第二款 津浦鐵路の出稼者取扱……………四〇

第三款 青島の客棧と出稼者及船會社との關係……………四二

第四節 滿洲出稼者の出身地……………四五

第一款 青島出廻苦力出身地……………四六

第一項 膠濟鐵路に依る各地方別出廻……………四七

第二項 海路青島に集まる者……………五一

第二款 芝 罘……………五二

第三款 龍 口……………五三

第四款 津浦線經由……………五四

民國十七年の滿洲出稼者

第一章 民國十七年の滿洲出稼者概況

民國十六年の出稼者（苦力、避難民、農業移民等一切を含む）数は上半期約七十萬、下半期約四十八萬、合計約百十八萬の巨數を示し、而も從來の移動に於いて季節労働者が大半を占めたるに對し、永住的移民が約半數を占め同年内歸還數を控除した殘留者は七十二三萬の夥しき數に達した。

從來より山東の青島、芝罘、龍口及河北の天津諸港及京奉線より流出する支那移民の繼續的流は、確に今日世界の何處に於ても認め得ぬ現象であつたに拘らず、見慣れた吾人には目新しく影ずることなく、何等の感興も唆らなかつた。然るに前年度に於ける劃期的大數の民族移動の流は、之に依る經濟的影響ミか、鮮人壓迫問題惹起ミか、其他諸般の問題に關聯する重要性を意識せざる無心者の眼さへ瞳らしむるに充分であつた。隨つて前年以來急に輕視すべからざる問題ミして、各方面の注意を喚起もし、亦研究の對象ミもなり、官憲の保護救濟策の如きも幾分充實を見た。

然して此の移民殺到は本年に入つても減少の模様なく、六月迄の渡來者は既に約七十二萬を數へ僅少ながらも前年を凌駕した。六月以後時局安定に依り、前年に對し其の減少率を、稍々低下せる様であるが大正十五年以前の例

に做ひ上半期と下半期の割合を六三四として推算しても百萬内外の出稼数はあつたを考へられる。渡來者の素質も亦前年同様所謂出稼苦力比較的少なく避難民及農業移民に多かつた關係上、六月迄の歸還數も前年約十四萬八千に對し本年約十五萬七千にして、結局殘留者は前年約四十一萬三千に對し、本年約四十一萬六千にして殆んど變りなかつた。

其奥地分布數は從來より北滿遷増の趨勢にあつたのが本年は東邊道一帶に互つて刀匪事件が勃發し、偶々刀匪に山東省民の多數含まれてゐたことに依り、官憲の態度一時冷後に歸した爲め北滿移住者率を高くし、前年七十萬の入稼者中北滿は三十六萬にして約五二%なりしも、本年は入稼數約七十二萬に對し四十三萬にして六十%を示した。茲に叙上本年六月迄の入稼數、離滿數及移住者の南北滿洲の分布數を表示するに次の如くである。

- 一、入 稼 數 約 七十二萬人
- 二、分 布 數
 - 1、南 滿 約 二十九萬人
 - 2、北 滿 約 四十三萬人
- 三、歸 還 者 數 約 十五萬七千人
- 四、移 住 者 數 約 四十二萬人

以下各章に互つて本數の據つて來るを出来るだけ詳細に互つて記述する。

第二章 滿洲への出稼者數

第一節 總 數

昭和二年上半期に於ける出稼者の異常なる増加は下半期に於ても減少を見ず、遂に百十八萬に達し前年たる大正十五年約六十萬に對し殆ど倍額に垂んじた。然して本年上半期に於ても出稼者の渡來は益々旺盛を極め、汽車汽船の無賃扱を受ける幼児を除き七十二萬と謂ふ推定計算になつた。次に入稼經路別に前年上半期の數字を比較掲載する。

經 路 別	昭 和 二 年	昭 和 三 年
一、大 連 上 陸 數	三三一、四六〇	三三〇、二七二
二、營 口 上 陸 數	八八、六四七	八九、二一〇
三、安 連 上 陸 數	二二、八〇八	二〇、七九二
四、康 奉 線 奉 天 驛 下 車 數	一三五、六二六	一五〇、九〇〇
五、京 奉 線 皇 姑 屯 下 車 數	九四、一二四	一〇四、六六四
六、京 奉 線 沿 線 徒 步 者	二六、三四五	二四、一六二
合 計	七〇〇、〇〇〇	七二〇、〇〇〇

註一、昭和二年の數字が前年度編推定數と相違するは營口の上陸推定の根據とした、大連港上陸者の海關報告數に對する超過率に移動があつたこと、及京奉線奉天驛下車を調査時報第八卷第九號に依つたこと、隨つて皇姑屯驛下車數の推定も之に根據した等の爲である。

即ち本年は前年に對し約二萬の増加である。之に幼兒數を前年同様全體の五%と觀るに、出稼の總數は概略七十五萬なる譯である。

第二節 徑路別入滿數

第一項 大連上陸數

三三〇、二七二人

當課發行調査時報第八卷第九號に依つて本年上半期中大連に上陸した苦力及其家族數を月別及男女別に表示すれば次の如くである。

大連上陸苦力及家族數月別統計

月次	年次	男		女		計	
		實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
一月	昭和二年	一一、三七八	八五・二%	一、九六二	一四・八%	一三、三四〇	一〇〇・〇%
二月	昭和二年	一一、〇九五	七七・四%	三、五一七	二二・六%	一五、六一二	一〇〇・〇%

計	六月		五月		四月		三月		二月	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
三三〇、二七二	二七五、八二四	八二・七%	二七五、八二四	八二・七%	二七五、八二四	八二・七%	二七五、八二四	八二・七%	二七五、八二四	八二・七%
二七五、八二四	一九、〇一四	六・九%	一九、〇一四	六・九%	一九、〇一四	六・九%	一九、〇一四	六・九%	一九、〇一四	六・九%
二七五、八二四	一四、五二五	五・三%	一四、五二五	五・三%	一四、五二五	五・三%	一四、五二五	五・三%	一四、五二五	五・三%
二七五、八二四	二一、七〇一	七・九%	二一、七〇一	七・九%	二一、七〇一	七・九%	二一、七〇一	七・九%	二一、七〇一	七・九%
二七五、八二四	四〇、四七七	十四・七%	四〇、四七七	十四・七%	四〇、四七七	十四・七%	四〇、四七七	十四・七%	四〇、四七七	十四・七%
二七五、八二四	五五、五九〇	二十・〇%	五五、五九〇	二十・〇%	五五、五九〇	二十・〇%	五五、五九〇	二十・〇%	五五、五九〇	二十・〇%
二七五、八二四	一〇六、四二八	三八・四%	一〇六、四二八	三八・四%	一〇六、四二八	三八・四%	一〇六、四二八	三八・四%	一〇六、四二八	三八・四%
二七五、八二四	二二八、一九〇	八二・八%	二二八、一九〇	八二・八%	二二八、一九〇	八二・八%	二二八、一九〇	八二・八%	二二八、一九〇	八二・八%
二七五、八二四	七九、〇六九	二八・七%	七九、〇六九	二八・七%	七九、〇六九	二八・七%	七九、〇六九	二八・七%	七九、〇六九	二八・七%
二七五、八二四	三三、〇〇三	一二・〇%	三三、〇〇三	一二・〇%	三三、〇〇三	一二・〇%	三三、〇〇三	一二・〇%	三三、〇〇三	一二・〇%

即ち本年上陸數は三三五、七七六名であつて昨年同期間の上陸數三三三、六〇九名に比較すれば二、一六八名の増加なるも安東よりの上陸者五、五〇四名を控除した實際上陸數は却つて二五六名の減少である。

第二項 營口上陸數

八九、二二〇名

營口上陸苦力及家族數月別統計

月別	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年
三月	五、六〇六	四、六四三	三五、二一四	三〇、二〇二	一五、四一四	一八、三四五	七、〇八五	八、二二三	六三、三一九	六一、四二二						
四月																
五月																
六月																
合計																

註 本表數字は調査時報第八卷第九號に據る。

上陸苦力及家族數

營口本年度上陸數は右の如く昨年度同期に比べて一、八九七名約二千人の減少を示して居るが、同表に依れば本年度には前年度に掲載された其他諸港よりの上陸者（二、三八二人）の計上が省略されて居る。故に此方面よりの上陸者を嚮る前年度と大差なかつたこと顧慮して二三、〇〇人云ふ數字を加算すれば前年度より多少の増加のあつたものと思はれる。而も前年度編に於て營口上陸者推定の根據とした大連上陸者の實數の海關報告數に對する超過率は後述（第三章第二節第二款）の如く昨年は四〇%にも達し出張數者と同様に從來の二倍以上の増加を見た。前

掲本年度營口上陸者數八九、二一〇人は之に依つて推算したものである。

第三項 安東上陸數

二〇、七九二人

安東上陸支那人數月別統計

月次	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年
三月	七〇二人															
四月																
五月																
六月																
合計																

註 一、本表は調査時報第八卷第九號より引用した。

二、括弧内は推定數であつて合計に含まない。

本年上半期中安東上陸數は昨年比し三、五八五人の減少であつて、之を月別にすれば平均減少數約九〇〇人となり尠らぬ減少である。而も右表の示すが如く前年度に於ては六月分の數字を缺如せるを以て之を考慮の中に入れ

て比較する時、本年度の減少率は尙増加あるを免れない。

然して前年同様營口ミ安東ミは上陸支那人の事情を異にするの理由に依つて、右上陸支那人總數に對する八割を出稼者ミ見れば二〇、七九二名である。

第四項 京奉線關係

(一) 京奉線奉天驛下車數 一五〇、九〇〇人

京奉線奉天驛下車苦力數

年次	月次						合計
	一	二	三	四	五	六	
昭和二年度	二、五五八人	四、四八八人	三、三六三(七、〇五三)	二、七三二(一、七三〇)	三、六八〇(三、〇〇〇)	三、八〇〇	二五、六六〇(二八、八八〇)
” 三年度	三、八〇〇	二〇、一〇〇	四、一五〇(六、二〇〇)	四、八〇〇(二八、三三〇)	三、〇〇〇	七、八〇〇	二五、六六〇(二四、四〇〇)

註 括弧内は貨車輸送數にして同月數内に含まれて居るものである。

本表數字は調査時報第八卷第九號より引用した。

本表計上の昭和二年度數字が前年度編掲載の數字と多少相違するは調査者を異にする所以もあるが前年に於いて貨車輸送數の加算無きに因るものと思はれる。

右の如く本年の京奉線經由出稼者は他の大連、營口、安東の海港上陸者に於いて僅少ではあるが若干宛の減少を

見たるに反し一五、二七四名(約一一%)の増加であつて戦争の影響の片影さへ認められない許りが却つて最も時局の切迫せる四月の激増、五月の増加のあつた現象は奇異の感を抱かしむるものである。

(二) 皇姑屯驛下車數 一〇四、六六四人

奉天驛下車數の増加があつたからして必ずしも皇姑屯驛下車數にも同率の増加があつたミは稱し難いのみならず反對の現象さへ想像され得る。併し乍ら本年は推定の根據ミなる何等の資料も得られなかつたが爲に、前年度編の兩驛下車數の割合に(皇姑屯下車は奉天驛の六九、四%に當る)依り推定する以外に方法がなかつた。故に一〇四、六六四人なる數は次掲徒歩者數同様頗る根據に乏しい人工的數字である。

(三) 京奉線徒歩者數 二四、一六二人

京奉線徒歩者數の推定は更に困難である。特に東北部沿線に至つては、大連、營口方面よりの徒歩者が加はつて雜然ミして北進するが爲、該方面の定住者にさへ見當がつかないミ云ふ。本數字は前年同様前五項の合計六五九、八三八人ミ合せて端數のつかない七十二萬ミ云ふ數にする爲に造つた數字である。

第三節 例年との比較

最近六年間出稼苦力經路別比較表

年次	大連港上陸	京奉線	安東	東營	口	合計	増加率
大正十二年六月迄	107,533	6,688	20,000	25,000	25,000	229,221	100
” 十三年同	103,350	147,503	20,000	25,000	25,000	295,853	128
” 十四年同	23,568	28,564	20,000	25,000	25,000	306,142	133
” 十五年同	25,925	27,023	20,000	25,000	25,000	377,977	165
昭和二年同	31,460	25,025	20,000	25,000	25,000	400,000	175
” 三年同	30,223	29,266	20,000	25,000	25,000	400,000	175

註 大連上陸数は實數、但し大正十五年以前は女子を除く女子は數千乃至一萬見當。

安東、營口の數字は海關統計により見當をつけたもの。

大正十五年以前の數字は前年度編掲載の儘なるも昭和二、三年の數は調査時報第八卷第九號掲載の數を引用した。但し京奉線の數字は之に二、三年兩年度共前述の如く徒歩者數、皇姑屯驛下車數を推定して加算した。

右表の示すが如く年々増加の傾向が見られたが昨年度より時局の影響に依り急激の増加を示し、本年上半期に於いても、僅少ではあるが昨年度を凌駕する程の移民があり、依然として其の旺盛の状態を持續して居るこゝが解る而して之を経路別に視るに海港よりの上陸者は營口約一千名の増加があつたに過ぎず大連、安東併せて約四千名の減少を示せるを以て、殆ん前年度と變りなく約三千名の減少となつたに反し、陸路京奉線をこつた者は約二萬四千人の増加であつて。故に出稼總數の前年度に對する増加も専ら當經路よりの増加に基因するものである。

併し乍ら良民を塗炭に苦めて離れ難き故山さへ捨てさせた時局も六月末には曲りなりにも終末を遂げ、加ふるに其の後の罹災民の現地救濟機關等の活躍目覺しきものあつた爲に、七月以降の情報中にも依然として移民の到來を絶たず云ふ例外もあつたが大體に於いて時局終息後激減を見た云ふのが誤りなき事實の報道であらう。故に一年を通じて前年と比較すれば前年より多少減少するこゝだらうと思はれる。

第三章 滿鐵線主要驛分布状態

第一節 總 說

既に入滿者總數が前年より大差なく僅に二一、三五五名の増加なることは、滿鐵線主要驛分布に就いても特記せねばならぬ程の異状なる現象は認められぬ筈である。殊に大連、安東、營口等各海港よりの上陸者は前掲したる如く、何れも極めて僅少の相違があつたに過ぎない。にも拘らず、北行乗車數に於いて次表の如く大連一二、一二五の増加、營口一一、四八一の減少、それに奉天よりの北行者は京奉線到着數の増加にもよるが、六二、七二九増加の異數を呈した。之各地の事情に前年度より多少の變化のあつたことを意味するものにして、徒步者並に三等乗客者に對し、前年度より同率を以て觀察を爲すことの適當なることを指示するものである。以下項を分ちて詳述するに先だち、入滿數より乗車北行數に就いて前年度との増減を表示してみるに次の如くである。

入滿數及乘車北行數昭和二、三兩年度比較

大連	入滿數及北行數		入滿數及乘車北行數	乘車北行數	
	昭和二年	昭和三年		昭和二年	昭和三年
三三,四〇〇	三〇,〇三三	△	一六,三三三	一七,三六八	
				△	
				三三,三三三	

營口	安東	奉天	合計	入滿數及乘車北行數		乘車北行數	
				昭和二年	昭和三年	昭和二年	昭和三年
八八,四七七	三三,〇八八	二五,七五〇	一四七,三一五	一四七,三三三	一〇,九六九	一〇,九六九	
八九,二二〇	三〇,七三三	二九,七三六	一四九,六八九	一四九,〇二二	一〇,九六九	一〇,九六九	
△	△	△	△	△	△	△	
五五三	三〇,一〇六	二四,九六六	一〇〇,〇七五	一〇〇,〇七五	一〇,九六九	一〇,九六九	
△	△	△	△	△	△	△	
二,〇九二	一,〇四五	一,〇四五	四,一四二	四,一四二	一,〇四五	一,〇四五	

註 △印は差引減少を示す。

第一項 大連及營口兩驛發貨車輸送數

大連、營口兩驛から沿線主要驛に輸送した人員に就ては、調査報時第八卷第九號に二年度と比較して本年の上半年に於ける輸送人員の發表あるを以て此に同表を藉りて説明することに、する。

一、仕向驛別大連發貨車輸送苦力及家族數月別統計

仕向驛	年次	月別						合計
		一月	二月	三月	四月	五月	六月	
鞍山	三二年	一〇六	一八〇	一,五八八	四三三	二二九	五九六	二,四四八
	三二年	一,二八六	三,〇四一	二〇,八四四	六,三三八	二,五八四	一,八三三	三〇,〇六六
	三二年	一九六六	九,二七〇	一七,三〇四	五,三三四	一,三三三	一,二七七	三六,〇八〇
奉天	三二年	五五	六九	六六	三〇〇	一四六	四〇六	一,四〇七
	三二年	一九六六	三,〇四一	二〇,八四四	六,三三八	二,五八四	一,八三三	三六,〇八〇
	三二年	一九六六	九,二七〇	一七,三〇四	五,三三四	一,三三三	一,二七七	三六,〇八〇
鐵嶺	三二年	五五	六九	六六	三〇〇	一四六	四〇六	一,四〇七
	三二年	一九六六	三,〇四一	二〇,八四四	六,三三八	二,五八四	一,八三三	三六,〇八〇
	三二年	一九六六	九,二七〇	一七,三〇四	五,三三四	一,三三三	一,二七七	三六,〇八〇

地の狀況に譲り、此處には單に貨車輪數を表示するに止める。

第二項 奉天、安東、大連、營口よりの三等乗客數

奉天及安東よりの三等客の出稼者は調査時報第八卷第九號に掲載せられて居るから之を引用することとする。大連、營口よりの三等乗客に對しては推定の根據として唯一の奉天驛推定の同驛著數あるを以て、此數から後掲、大連、營口兩驛發貨車輸送の奥地分布比率によつて三等乗客數を割出す事が出来る。

一、安東及奉天發三等乗客出稼者數

仕向驛別安東驛發奥地出稼苦力及家族數月別統計

仕向驛	年次		一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
	年	次							
鞍山	三二	三二							
奉天	三二	三二		四四三	四四三	四四三	四四三	四四三	一、七二七
鐵嶺	三二	三二		七二	七二	七二	七二	七二	二、九八
開原	三二	三二		五三	五三	五三	五三	五三	一、五九
計	三二	三二		一、〇六九	一、〇六九	一、〇六九	一、〇六九	一、〇六九	三、七六四

仕向驛	年次		一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
	年	次							
四平街	三二	三二							
公主嶺	三二	三二		一、八七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	五、〇八
長春	三二	三二		一、六四	一、〇七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	五、〇八
撫順	三二	三二		一、八七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	五、〇八
本溪湖	三二	三二		一、八七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	五、〇八
其他	三二	三二		一、八七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	一、〇七	五、〇八
合計	三二	三二		一、〇六九	一、〇六九	一、〇六九	一、〇六九	一、〇六九	三、七六四

仕向驛別奉天驛發奥地出稼苦力及家族數月別統計

仕向驛	年次		一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
	年	次							
鞍山	三二	三二							
本溪湖	三二	三二		一、〇六	一、〇六	一、〇六	一、〇六	一、〇六	三、二四
鐵嶺	三二	三二		一、〇六	一、〇六	一、〇六	一、〇六	一、〇六	三、二四
計	三二	三二		二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	六、四八

(其他中に含む)

開原	四平街	公主嶺	長春	撫順	其他	合計
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
年	年	年	年	年	年	年
二、三九九	二、一三三	一、三三三	二、二二二	六、二二二	一、七四四	二、六八八
五、〇四七	四、八九七	一、五五八	三、〇三三	四、六八四	二、八六四	四、九三二
三、五三〇	三、九四四	一、〇六二	二、二六六	三、三三三	一、五八三	三、九三二
二、四一九	二、三二九	七、二	二、三六八	二、七四四	一、九二二	二、五三三
一、八六一	一、五九三	四、四	七、三六六	三、三三三	一、二五五	六、〇〇〇
二、〇二二	一、四八八	六、二二二	二、三三三	三、四四四	三、三三三	一、〇〇〇
二、〇二二	一、四八八	六、二二二	二、三三三	三、四四四	三、三三三	一、〇〇〇

註 本表昭和三年度數字ハ調査時報掲載の數に一月分を加算した。

二、大連、營口發三等客出稼者數

仕向	年次	昭和二年	昭和三年
大連	連	二五、九五六	二八、九三六
營口	口	一七、七七七	四三、一九〇
合計	計	四三、七三三	七二、一二〇

註 營口發の二、三兩年度數に大なる開きがあるのは前年度貨車輸送に於て團體輸送の奉天者が多かつた爲に、本數算出の根據たる比率を高めたに基因する。

右表觀察に當つて注意せねばならないことは(一)奉天驛推定數の有つ正確さ(二)三等乗客車の奥地分布に對し、貨車輸送の分布比率を算出の根據とするは、果して期待するが如き結果が得らるゝか何うかといふ問題である。遺憾ながら右表に認められる、大連、營口の關係の解せない點、及大連發數の餘りに鈔きに過ぐる點なき、まづ算出の手段の不適當なるに原因するもの認めねばならない。

然して大連に於ける上陸者の減少及貨車北上者の増加が無賃輸送にあつたことは共に三等乗客が徒歩者かの減少を語るもの認めべきで、理論上無賃輸送の増加は徒歩者の減退を認むるを合理的とする。又後述(山東直隸出稼事情出稼者出身地参照)の如く芝罘、龍口等の地より税禍を逃れん爲に、概して困窮者でない、難民の流れ込んだ事實は三等客の増加を教ふるものである。故に本年度大連發客車乗車出稼者數は前年度推定數よりは幾許か多つたを見るを至當とする、又營口よりの客車乗車出稼者數も貨車北上者の異常なる減退により、確に増加が有つた譯であるが右表數字の如く多數で有り得ないことは貨車北上者の合計が遙に上陸者を超過するこゝが證して餘りある。以上の理由に依り兩驛發三等乗車出稼者數を次の如く推定する。

大連發三等客 八六、六八〇

營口發三等客 二〇、〇〇〇

何等の資料を得て居らない。故に徒歩者は杜撰極まる憶測ではあるが、大連の貨車輸送に於ける増加数だけ減少を見たものにして、六五、二二四名とする。而して營口に於いては前年度の貨車輸送者の上陸者に對する比率は七四%にして残の二六%二三、三七一名が徒歩者で三等客の合計である。營口よりの徒歩者は割合に少いにして九千名とする。本年度は六二%三八の割合にして三四、〇九六名なるも遼河の浚築工事其の他營口の地に残留せるものも河北驛に吸収されたものとの合計を約四千名とすれば、大體に三等乗客二萬と徒歩者一萬位の見當だらうと思ふ。

第二節 各地狀況

第一款 大 連

一、上陸者總數

大連上陸者總數累年比較

年次	期別	六 月 迄	十 二 月 迄	全年に對する六月迄の割合
大正十二年		一〇七、六三二	一七二、〇一四	六二・六%
大正十三年		一〇三、三五〇	一六七、二〇六	六一・八
大正十四年		一二二、五九六	一九七、三九二	六一・一

大正十五年	昭和二年	昭和三年
一六五、九一五	三三三、六三二	三三五、七七六
二六七、〇六一	五九九、四五二	五〇六、五五三
六二・一	五五・七	六六・三

註 大正十五年以前の數字には婦女子上陸者不明に就き加算してない。

即ち六月迄の移民數から想像すれば、本年の數は前年と略々同様なる譯である。唯上半期末に於て時局安定を見た結果、後半期の推定に關し前年度の比率に依ることは考慮すべきではあるが、全年を通じての到來數は大した變化を見ないのだらうと思ふ。

二、營口、安東及京奉線との比較此比較は既に第二章第三節に於て説明せる如く、本年は京奉線よりの入滿者が多數であつた爲め、同徑路の比率も之に従つて高くなり、他の海港經路の比率は何れも低下を示すに至つたものである。然し大正十二年より昭和二年度迄の五箇年平均四一%に比ぶれば未だ從來の平均以上に在り、大連經由の上陸者數は依然其の首位を譲らない。而も京奉線は六月に入つて間もなく時局の爲不通となり、十月末に於いて漸く開通を見たは雖も、僅に一週間二回の運轉なるを以て、一般旅客の輸送にさへ圓滿を缺く程の状態なれば、難民輸送の餘地なきは勿論である。故に全年を通じての大連の比率は、前年と大差なきか、之を凌駕するものがあつたのではないかと想像される。

經路別出發者數昭和二、三兩年度比較

經路別	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
大連	三三一、四六〇	四八	三三〇、二七一	四六
營口	八八、六四七	一三	八九、二一〇	一二
安東	二二、八〇八	三	二〇、七九二	三
京奉線(徒步者を含む)	二五四、七五〇	三六	二七九、七二六	三九
合計	六九八、六六五	一〇〇	七二〇、〇〇〇	一〇三

註 一、昭和三年合計欄の百分率は二年合計に對する増加率である。

二、昭和二年度數字の前年度編との相違は第二章第三節に於て説明した。

三、營口、安東の上陸者に就ては第二款營口、第三款安東にて説明することにする。

尙之に就いて大正十二年より昭和二年迄の比率を求むれば次の如くである。

年次	大連		營口		安東		京奉線		合計	
	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%
大正十二年	一五、〇四八	四	七、〇七七	一八	四、五七九	二	三六、〇二二	三	四三、六六八	二
大正十三年	一七、二〇六	四	六、六〇四	三	三、六二二	二	二〇、七九二	三	四八、四二二	二

年次	大連		營口		安東		京奉線		合計	
	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%
大正十四年	一七、五三三	三	六、六〇七	八	四、四〇〇	八	一七、九二二	三	三六、八五二	一〇〇
大正十五年	二七、〇六三	四	三、四七三	三	四、八七七	八	一七、二六〇	二	二六、七三〇	一〇〇
昭和二年	一九、九三三	三	三、七三三	五	六、九一九	六	三七、四三三	二	一、二九、八三三	一〇〇

註 大正十五年以前の大連上陸者には婦女子が加算されてない爲、實際數は今少し率が高くなる。

三、貨車輸送者の主要驛分布状態 無賃輸送を含めた貨車輸送数は前年度に比較すれば一二、一三五の増加なるも、之を除けば却つて一一九一の減少である。故に其の數は殆ど前年度と變らなかつたを稱することが出来る。同時に主要驛の分布状態も次掲の如く前年度に較べて大した變化は認められない。強いて指摘すれば長春の部は二年度約五〇%に對し、三年度約五六%、奉天の部は二年度約二二%に對し、三年度約二二%にして、兩地方とも本年度稍々増加の跡を見せたに反し、撫順は二年度一五%、三年度一一%にして稍々減少してゐる。

貨車輸送による主要驛分布状態

仕向驛	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
鞍山	二、四四八	一・五	二、四四八	一・五
奉天	三、四八八	二・七	三、六三三	二・七
鐵嶺	一、四〇七	〇・八	一、四九七	〇・九

開原街		公主嶺		長春		撫順		其他		合計	
11,210	70	2,737	117	1,929	500	24,630	153	1,062	1,000	160,743	1,000
5,517	35	4,037	125	89,839	563	17,829	113	39	159,552	1,000	1,000

註 本表には無貨輸送の分は含まない。
尙過去五箇年分を併せて、年別に表示比較すれば次の如くである。

大連驛發貨車輸送苦力仕向地別累年比較表

年次	仕向驛	長春	公主嶺	四平街	開原	鐵嶺	奉天	鞍山	撫順	計
大正十二年		16,521	4,244	4,455	3,288	766	8,566	1,267	5,448	55,552
同十三年		19,400	4,444	5,452	2,400	566	8,064	2,357	5,448	55,552
同十四年		3,451	4,444	1,266	3,451	1,266	1,266	1,266	1,266	55,552
同十五年		42,567	1,350	2,263	7,688	1,266	2,266	3,266	3,266	55,552
昭和二年		26,666	3,071	6,133	17,768	2,266	8,064	4,266	4,266	55,552
昭和三年		89,666	2,133	4,067	5,577	1,266	3,266	2,266	1,266	55,552
同六月迄										55,552

註 本表には無貨輸送を含まず。

四、貨車輸送数の上陸者数に對する割合 本項一、四掲載の数字によつて貨車輸送数の上陸者に對する割合を求むるは次の如くである。

年次	上陸者数	貨車輸送数		差		引
		員数	%	員数	%	
昭和二年	333,363	166,233	50	167,399	50	50
昭和三年	335,776	178,368	53	157,408	47	47

註 本表数字は調査時報第八卷第九號より引用せり。

右の如く本年度貨車輸送者も大體に於て前年度と變りはなく約3%の増加にして上陸者の半數強であつた。此の増加は前述によつて明白なる如く無貨輸送者の増加に因るものである。故に差引數中に含む三等客、徒歩者、大連地方残留者の割合を考察するに當つて、徒歩者の減少なることを指示するものとして取扱つても差支ないだらう。序に過去數年間の比率を表示して参考に附する。

年次	上陸者数	貨車輸送数		差		引
		員数	%	員数	%	
大正十二年	172,014	36,335	21	135,679	79	79
大正十三年	167,206	39,833	24	127,374	76	76

民國十七年の滿洲出稼者

大正十四年	一九七、三九二	五四、九九二	二八	一四二、四〇〇	七一
大正十五年	二六七、〇六二	八八、三〇〇	三三	一七八、七六二	六七
昭和二年	五九九、四五二	二六四、三九八	四四	三三五、〇五四	五六

二八

大連に於ける上陸者に對する貨車輸送数は營口等に比較するに極めて少かつた。然して從來からの漸増的傾向も昭和二年度の移民激増に伴つて、上陸者全數の半數に近い比率に躍進した。尙過去數年間の傾向に依れば徒歩北行者か、然らざれば三等客かの相當數あつたことが窺知し得られるが、此の外に大連の地が持つ之等出稼者の消化力も亦可成大きなものであつたことを説明する。

五、出稼者の仕出港別比較 仕出港別に昭和二年度及三年度の數を見るに次の如くである。

仕出港	昭和二年		昭和三年	
	員數	割合	員數	割合
青島	一九〇、〇五〇	五七%	一六四、二四八	四九%
芝罘	六四、五三四	一九	四七、〇三七	一四
龍口	三四、五一五	一〇	三七、二二四	一一
天津	四〇、一三八	一二	二九、八二二	九
安東	三、一四九	一	五、五〇四	二
其他	一、二四六	一	五一、九五一	一五
合計	三三三、六三二		三三五、七七六	

其の他諸港を除けば各港とも二年度に比し、絶對數も比率も共に減少を示してゐるが、之は其の他の部に青島、芝罘、龍口の寄航を含むに原因するものである。随つて其の他諸港よりの仕出は異常なる増加を呈するに至つたが、之を從來の例に倣ひ、寄航地仕出のものに認めて、其の他諸港よりの上陸者約五萬人を各港に還元すれば、大體に於て各港とも前年度と同數位の出稼者があつたことになる。

大連上陸出稼者の仕出港別比較表

年次	青島(海州を含む)		芝罘(威海衛を含む)		龍口(登州を含む)		天津		安東		其他諸港		合計	
	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%
大正十二年	六、三三	三	六、六	三	三、八九	一九	一一、四二	七	一	一	五、八〇	三	一七、〇四	二
大正十三年	四、二二	二	五、六二	三	六、七九	三	一四、六二	九	一	一	一四、九三	九	一七、〇六	二
大正十四年	六、七〇	三	四、八五	二	六、六六	三	一八、六四	九	一	一	三、九〇	三	一七、五二	二
大正十五年	三〇、九六	四	七、五八	二	四、四三	二	三〇、六四	二	一	一	七、九六	四	二五、〇五	三
昭和二年	三三、〇五	五	一四、五五	二	五、六八	二	三、六六	九	一〇、七五	二	三、六〇	一	五九、四三	三
同六月迄	一四、三六	四	四七、〇七	一四	三、三四	二	二九、八三	九	五、五四	二	五、五二	一	三三、七六	三

註 大正十五年以前の安東よりの上陸者は其他諸港中に含まる。

大正十五年以前の員數には婦女子を含まない。

其の他諸港の異常なる増加は青島、芝罘、龍口等の寄航地乗船者を之に含むが爲である。

序に移住的傾向を窺ふ一基本を做される婦女子数を各港別に観るに次の如くである。

大連港上陸婦女數仕出港別累年比較

年次	仕出港		青島(海州を含む)		芝罘(威海衛を含む)		龍口(登州を含む)		天津		安東		其他諸港		合計		
	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	
大正十四年	三、八四四	五三	二、九七二	三三	二、〇四〇	九	二、五三三	二二	—	—	—	—	—	—	二、三三三	一〇	三、三九九
同十五年	一、八五七	六二	四、三五五	一四	二、一〇六	七	四、三三三	一五	—	—	—	—	—	—	四、八八八	二	三、〇八八
昭和二年	八、七八三	七四	二、〇三三	一七	三、九四四	三	五、一六七	四	—	—	—	—	—	—	六、三三三	一	二、八三三
同三年	四、九二一	九	四、四四四	七	二、四四三	四	三、四九九	六	—	—	—	—	—	—	一、〇六六	二	五、七〇五

註 大正十四年安東よりの上陸者は其他諸港中に含まる。

右表に就いて観るに婦女子の増加率は青島最も高く、芝罘之に次ぎ、天津、龍口の地は絶対數は増加なれど前二港の著増に依り、却つて比率を低めて居る。故に住馴れた山東の地を見限つて、滿洲の地に永住せんとする意志を抱ける渡來者は、青島、芝罘方面のものに多いことは概言出来る。

六、歸還苦力狀況 以上に於て大連港出稼者の狀況を説明した。殊に前年及本年上半期の異數の増加は吾人の眼を惹いた現象に云へる。而して歸還者の數は何うかといふに出稼男女共例年と殆んど大差が無かつたことは次の二表がよく説明して呉れてゐる。從來彼等の歸還経路は大連經由の海路は汽船の連絡好都合ならざる場合、行程日數よ

り見て客棧費嵩み運賃計算に於いても金銀兩替を餘儀なくせられる等の煩累あるのみならず、往々相場上の不利を招く場合も尠くないから、運賃の割引其他の便宜の多い京奉線による場合が多かつたといふ事情に就ては前年度編の詳細に説明するところである。然るに前年及本年上半期の如く山東の地が未だ不安に置かれ、而も彼等出稼の主因が此の不安に動機したところから思へば、戦塵渦捲く同地方經由の歸還者が、出稼者同様に異常の増加があつたことは想像出来ない。大連港發歸還苦力を仕向港別に示せば次の如くである。

仕向港別大連乗船苦力數

仕向港	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
青島	一七、九二五	—	一五、四六七	—
芝罘	二二、一九七	—	一四、〇八〇	—
龍口	一五、五八六	—	一七、〇八一	—
天津	五、六四四	—	五、一四三	—
安東	三、七二五	—	一、〇三九	—
其他	七一	—	一三、三七四	—
合計	六五、一四八	—	六六、一八四	—

大連港發苦力數仕向港別累年比較

月次	仕向港		青島	芝罘	龍口	天津	安東	其他諸港	合計
	員數	%							
大正十二年	三、二八	三	四、四一	元	二、六五	三	九、五八	二、八五	三、四四
大正十三年	三、六四	六	三、五九	三	三、七五	三	九、四七	九	三、三九
大正十四年	三、五五	三	三、五九	六	三、七五	八	七、六四	二〇	三、三九
大正十五年	四、三五	六	二、九五	三	三、五〇	一	三、〇三	四	三、〇三
昭和二年	三、〇六	六	四、五九	七	二、八三	二	三、三三	一	三、〇六
昭和三年 (六月迄)	一、四一	三	二、六	四	二、五	八	一、〇〇	一	一、〇〇
合計	三、〇六	六	三、〇六	七	二、八三	二	三、三三	一	三、〇六

大連港發出嫁婦女數仕向港別累年比較

月次	仕向港		青島	芝罘	龍口	天津	安東	其他諸港	合計
	員數	%							
大正十四年	三、三六	四	一、五二	三	一、〇五	二	二、八	九	六、〇三
大正十五年	二、三五	三	二、〇三	三	一、〇四	二	九	九	六、〇三
昭和二年	二、三六	三	三、五三	四	一、四〇	二	九	七	六、〇三
昭和三年 (六月迄)	一、四〇	三	五〇	三	七	二	六	三	四、〇三
合計	一、四〇	三	一、四〇	三	七	二	六	三	四、〇三

各経路別に特に吾人の注意を惹くものは前掲出稼者の増加せる青島、天津方面の時局の紛糾せる地方の歸還が何れもより減少せることである。尙歸還者の出稼者に対する割合を示せば次の如く從來年々漸減の現象があつたが昨年度に於いて急激に低下を見てゐる。之は歸還、出稼の各々の指數が示す如く歸還者の數は殆んゞ年々大差を見ないから出稼者の激增を説明するものであつて其の比率も出稼者の増加率だに稱することが出来る。

大連港に於ける出稼及歸還華工比較表

年次	出稼及歸還	出稼數	歸還數	歸還者の出稼者に對する割合
大正十二年	一七二、〇一四人	一七二、〇一四人	一一二、四七四人	七一%
同 十三年	一六七、二〇六	一六七、二〇六	一一三、二四九	六八
同 十四年	一九七、三九二	一九七、三九二	九六、九五九	四九
同 十五年	二七三、〇七二	二七三、〇七二	一二九、六三六	四七
昭和二年	四八一、〇八一	四八一、〇八一	一三三、〇七九	二八
同 三年 (六月迄)	二七七、四九七	二七七、四九七	六二、五〇八	二二

註 本表には婦女子を含まない。

元來主要歸還期は十、十一、十二月等であるから、昭和三年上半期の歸還率は極めて低いが之を以て年全體を推定することは出来ない。

第二款 營口

一、上陸者總數 既に第一章第二節第二款に於いて本年度營口上陸者總數を八五、九九一人として之を掲げた。而して其の推定の根據を大連上陸支那人全數に水上警察の船舶出入簿に置いたことも同時に之を斷つておいた。其の理由とするところは、前年度編に於いて述べられた如く大連に於ける上陸者の實際數が海關届出數に超過するに云ふ事實は大連のみでなく營口に於いても同様でなくてはならぬと認められたからに外ならない。

本年推定の根據たる昭和二年度の大連に於ける超過率を求むるに同時に併せて過去四年分を表示すれば次の如くである。

大連上陸支那人數に對する出稼苦力數の比較

年次	員數及割合		大連上陸支那人數	苦力數	苦力數に對する支那人數に對する割合
	員數	割合			
大正十二年	一六三、一八四	—	—	一七二、〇一四	—
同十三年	一五八、〇五七	—	—	一六七、二〇六	—
同十四年	一七八、四九二	—	—	一九七、三九二	—
同十五年	二二五、六五二	—	—	二六七、〇六二	—
昭和二年	四二七、八九二	—	—	五九九、四五二	—

註 大連上陸支那人數は青島、芝罘、龍口、威海衛、天津及安東より來れるもの。苦力數中には上記以外の諸港より來る者を含んで居るが其の數は極めて少數であつて全體率に殆んど影響はない。

右の如く從來から其の超過率が全體數の増加に正比例して累進する傾向は認められるのであるが、果せるかな昭和二年度のの上陸總數が例年に倍する増加を示したに對し、超過率も之に伴ひ其の二年度は前年一八%に對し倍額を超過する四〇%の超過を見た。故に前掲二年度の營口上陸者の推定も此の超過率に基いた許りでなく、本年上半期に於ける其のものも出稼者數及出稼事情に於いて略々前年と大差が無かつたが爲に同率を以つて推定した。

二、上陸者の仕出港別比較 次に營口海關報告に依る出稼者數を年度別、仕出港別に列擧し、前掲大連港の超過率を以つて上陸出稼者の實際數を推算した。

仕出港別出稼者數累年比較並に推定數

年次	仕出港別		青島	芝罘	龍口	天津	合計	推定苦力數	超過率
	員數	比率							
大正十二年	三三〇	—	—	二、三五〇	三、〇八〇	三、〇八〇	三、〇八〇	—	
大正十三年	三〇〇	—	—	八二〇	二、九二〇	二、九二〇	二、九二〇	—	
大正十四年	三〇〇	—	—	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	—	
大正十五年	三〇〇	—	—	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	—	
昭和二年	二、二〇〇	—	—	一、一〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	—	
昭和三年	二、二〇〇	—	—	一、一〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	—	
昭和四年	二、二〇〇	—	—	一、一〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	—	
昭和五年	二、二〇〇	—	—	一、一〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	—	
昭和六年	二、二〇〇	—	—	一、一〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	—	

註 本表數字には婦女子を含む。

而して二年六月迄、三年同期間の管口上陸者に就いては前掲月別比較第一章第二節第二款の如く約二千の減少である。併し乍ら本年度には其他諸港よりの計上洩れあるを以つて之を考慮すれば極めて僅少の相違となり随つて各港よりの仕出状況も左の如く前年、僅少の變化があつたに過ぎない。

管口支那人上陸者二、三兩年度比較

仕出港	昭和三年		昭和二年	
	員數	%	員數	%
青島	五二三	—	一、三〇〇	二
芝罘	三五七	—	五七四	—
龍口	一九、九六九	三三	二二、四五九	三七
天津	四〇、〇八八	六五	三七、〇八九	六〇
其他	二、三八二	四	—	—
合計	六三、三一九	一〇〇	六一、四三二	一〇〇

一、本數字は海關報告數である。

大體の趨勢に於いては變りはないが、天津からの渡來者に稍々減少を呈し、一方龍口方面よりの出發者の増加を見たのは、西部山東方面の風雲急を告ぐるやいち早く京奉線は難民輸送に便宜を與へ、更に京津の地が混亂に墜るや、同方面からの輸送は海陸共杜絶した等の一時的現象に基くものだらうと考へられる。

三、大連、安東及京奉線との比較 管口上陸者數と他徑路による入滿者との比較は既に大連の項(二)に於いて述べた處によつて明瞭である。即ち本年六月迄の管口上陸者數に於いて叙上の如く其他諸港よりの渡來者を考慮することによつて僅少の増加を示したが其の率に於いては昨年一三%に對し本年一二%にして一%の減少を來した。之は全く京奉線よりの入滿者の増加が總數に於いて約二萬の増加となつたが爲である。

尙過去に於ける上陸數及比較に就いても前項(二)の第二表を藉りなければならぬが、同表の指示するところに見れば昭和二年度管口上陸者數は二〇七、九七三にして前年の一二四、七四三に比較すれば八三、二三〇即ち約六七%の増加があつたのであるが、入滿總數に對する比率に於いては約五%の減少を示した。右の如く絶對數に於いては相當の増加があつたにも拘らず、斯かる現象を呈したに就いても大連港及京奉線徑路の増加が思ひやられるのである。

四、貨車輸送に依る主要驛分布状態 次表の數字は前に本章第一節に依つて月別に之を掲げたが、茲では單に主要驛の分布状態を見る爲に、行先地不明の無賃輸送數を除く總數に對する比率だけを示すこととした。

管口驛發貨車輸送出稼者主要驛分布状態

仕向驛	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
天	二五、三七九人	三九	二二、一九七人	三三

鐵	開	四	公	長	撫	其	合
嶺	原	街	嶺	春	順	他	計
二二八八	一一二一三	七〇〇	五一一三	三四、四〇七	二、一八八	五八八	六五、二七六
二	二	一	一	五三	三	一	一〇〇
二三八	六九八	九〇四	四九六	三六、〇二四	三、八九二	六六五	五五、一一四
一	一	二	一	六五	七	一	八四

註 本表には無貨運送を含まない。

右に據れば本年は合計數に於て約一萬一千餘、前年度より減少してゐる。随つて各地への分布數は長春一、六一七人、撫順一、七〇四人、四平街二〇四人の増加があつた異例を除けば、各地共減少を示し、特に奉天の減少は一三、一八二の多數にして、總數に對する比率は前年三九%に對し本年二二%といふ激減である。之に就いては前年度編に於て記述せられてゐなかつたが、二年度數中には一九、八一〇人の奉海線工事使用、長春向中六、〇二五人の吉敦線工事使用の團體輸送者を含むが爲に、之等を考慮するに、分布比率に於ける奉天、長春兩者間の前年度との相違は尠からぬものとなり、本年度營口發長春向數は大連、安東發に於て確め得た長春向比率の遞増と共に、一般に北滿向増加の趨勢を説明するものである。

尙年未迄の兩年度奧地輸送數並數年來の數を各驛別に掲上して置く。

營口驛發貨車輸送苦力數年別統計

年次	長春	公主嶺	四平街	開原	鐵嶺	奉天	撫順	合計
大正十二年	三、七〇二	一、〇四六	一、八三三	三、六四三	七三	二〇、八三九	二、五九八	四、三三〇
大正十三年	三、三三七	八九	一、四九三	二、五九八	一、〇〇〇	二、七〇三	二、三三九	四、三三〇
大正十四年	二、二九二	一、〇三三	一、三三二	三、〇〇九	九四	二、三三〇	三、三三〇	四、三三〇
大正十五年	四、三〇一	一、一七	二、八六〇	二、九七七	九二	二、六〇〇	三、四〇二	四、三三〇
昭和二年	五、四四九	一、五七七	三、六〇〇	三、五九九	九七	三、〇〇〇	六、五五五	四、三三〇
昭和三年	五、〇〇四	四六	九四	六九	三三	三、一九七	三、八三二	四、三三〇
昭和六年迄								五、二四

註 本數字中には婦女子を含むも、無貨輸送の分は含まない。昭和三年度合計數には其他各驛の分六六五人を加算せり。

驛別	年次		月												一年合計
	年次	年次	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	員數						
奉天	天	三二年	一、二二〇	一、〇一七	三、九七五	二、〇〇〇	二、三三六	二、三三六	二、三三六	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	
			三二年	三二年	一、二二〇	一、〇一七	三、九七五	二、〇〇〇	二、三三六	二、三三六	二、三三六	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
鐵嶺	嶺	三二年	五五	六六	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	
			三二年	三二年	五五	六六	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八

開原	四平街	公主嶺	長春	撫順	四洮	合計	上陸者數		貨車輸送數		差		引
							員數	%	員數	%	員數	%	
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	六,四四〇	六八.九	七,五二二	二四.三	七,八八六	二〇.九	二,〇七九
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	二,五三三	一.六	三,八二八	三.七	二,三〇八	一.一	一,五八八
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三,九〇六	二.五	五,一三三	一.二	四,八二六	一.二	一,〇九二
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	四,二二五	三.六	六,八二七	一.九	六,四〇六	一.七	二,二二〇
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	五,三三三	四.九	八,二六七	二.四	七,七三三	二.〇	二,四〇四
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	六,四四〇	六.八	一〇,〇〇〇	三.〇	一三,四四〇	三.〇	七,〇〇〇

五、貨車輸送數の上陸者に對する比率 前掲數字に依つて兩年度の上陸者の何割位が貨車輸送されたかを視るに次の如くである。

年次	上陸者數		貨車輸送數		差		引
	員數	%	員數	%	員數	%	
昭和二年	八八,六四七	一〇〇	六五,二七六	七四	二三,三七一	二六	
昭和三年	八九,二一〇	一〇〇	五五,一一四	六二	三四,〇九六	三八	

前年は異數の團體輸送者があつた爲に特に高率を示した様である。本年の貨車輸送數も雖も上陸者の六二%を占むる程で大連に於けるものよりは遙に高率である。之徒歩者の少數なるばかりでなく前年度編第二章第二節第二款に於て述べてある如く、要するに近年不況の爲、新事業は起らず、從來營口ミ緣故のない新しい苦力を消化するだけの餘裕が無いといふ事に歸着するもの、如く考へられる。尙過去數年間の全年に關する比率も次の如く之ミ大した相違を見ない。

上陸者數に對する貨車輸送數の比較

年次	上陸者數	貨車輸送數		差		引
		員數	%	員數	%	
大正十二年	七三,四一六	四四,五九二	六一	二八,八二四	三九	
大正十三年	六一,九〇四	三七,一四五	六〇	二四,七五九	四〇	
大正十四年	九六,六四七	五〇,四四四	五二	四六,二〇三	四八	
大正十五年	一〇五,七二四	八七,四六八	八三	一八,二四六	一七	
昭和二年	一四八,五五二	一一四,九一六	七七	三三,六三六	二三	

註 本表貨車輸送數には總べて團體輸送者が加算されてゐる。

六、歸還苦力狀況 營口より山東及直隸の地に歸還する出稼者に關して信頼すべき統計はないが、大正十二年後の海關統計に依れば次の如くである。

陸者を仕出港別に表示するに、本年は芝罘が過半数を占め、青島との關係を顛倒せしめたことは何等かの理由に基くものであらうが、適當な説明資料もなく判明しない。但し從來から柞蠶絲の市場である安東の地が柞蠶製糸並に絹紬業地とし古くから著名な芝罘と密接な關係にあることだけ斷つて置く。

仕出港別安東上陸支那人數前年度比較

仕出港	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
青島	一一、九七八	四〇・五	五、八二五	二二・四
芝罘	一〇、一五八	三四・三	一三、一二三	五〇・五
龍口	一、三〇六	四・四	一、七六三	六・八
天津	二、三三八	七・八	二、三六八	九・一
大連	三、八一五	一二・九	二、八三六	一〇・九
其他	一	一〇・〇	七五	三
合計	二九、五七五		二五、九九〇	八七・八

註 本表は調査時報第八卷第九號に依る。

二、貨車輸送による主要驛分布状態

仕向驛別安東驛發奥地出稼苦力統計

仕向驛	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
鞍山	三四	一	一五	一
奉天	三、一七四	二九	二、五九四	二四
鐵嶺	八九	一	一、一五	一
開原	三二七	三	二、四〇	二
四平街	二六三	二	二、四二	二
公主嶺	三三	一	三	一
長春	五、八八八	五三	六、七一九	六一
撫順	七三六	七	五八七	五
本溪	一	一	二〇九	二
其他	四五五	四	三三一	三
合計	一〇、九九八	一〇〇	一一、〇四五	一〇〇

註 本表は調査時報第八卷第九號に依る。

右表に據り各縣への分布状況を視るに長春第一位、奉天第二位なる點及本年度長春向増加の點に於て、他經路の状況一致する。即ち前年に對し長春は八百餘名の増加なるに反し、奉天約六百名の減少である。取立て説明する程の巨數ではないが、強いて其の理由を尋ねれば後述したる如き大刀會の跋扈に依り南滿一帶官憲の難民に對する態度が一變したるに多少の影響を蒙つた見られるのである。

三、上陸者に汽車に依る北行者との關係 叙上によつて昭和二、三兩年度の上陸者に對する、汽車に依る北行者の比率を求むるに次の如くである。

年次	上陸者數	汽車に依る北行者		差	
		員數	%	員數	%
昭和二年	二二,八〇八	一〇,九九八	四六	一一,八一〇	五四
昭和三年	二〇,七九二	一一,〇四五	五三	九,七四七	四七

右の如く本年度は上陸者の減少なるに拘らず北行者が増加した爲、其の比率は前年の丁度反對となつた。單に吾々が机上に於て想像するにしても、安東上陸出稼者なるものは、直に背後地方へ徒行するものも、安東の地に職を求むるの目的を以て上陸したものもこの二通りしか考へられないのであつて、假令上陸後諸種の事情により、更に北行を企てるものがあるにしても、それが大連に匹敵する程の北行比率を示さうとは想像も及ばなかつたところである。此の間の消息を窺ふ爲に、調査時報第八卷第九號の安東經由入滿苦力及家族數移動率月別統計を藉りる。

安東經由入滿苦力及家族數移動率月別統計

月次	移動率	上陸者		汽車に依る北行者		差	引
		員數	%	員數	%		
二月	三二						
三月	三二	七三	三三	三,一五九	三八	一,五三三*	二八
四月	三二	一九八五	三三	三,三〇八	二七	二六,五〇七	二八
五月	三二	六,九九九	三三	三,二七四	二九	三,七二五	二八
六月	三二	九,一六〇	三三	二,〇〇四	二二	七,一五六	二八
合計	三二	二九,七五三	三三	一〇,九九八	三三	一八,七五五	二八

註 ※印は上陸者に對する汽車北上者數の超過を示す。
本表は調査時報第八卷第九號に依る。

安東に他港との相違は從來北行を目的とする出稼者の極めて少かつたに在る。故に右表乗車北行者の大半は安東附近在住者の出稼及移住數であるを見て差支へない。此の點は開河以前の月に既に數千名の北行者があること、の事實が證明して餘りある。此の他安東には繁忙期に九千乃至一萬餘名の山東よりの出稼者を當港より吞吐するの

事情もあり、背後地徒歩進人者も勿論ある。確数は掴めないが、之等を合算すれば裕に上陸者數に近似の數が得られる譯である。例を昭和二年度に於て説明するに、安東各救濟機關の前年一年間の合計は一萬六千名發表せられ、前年度編に依れば四月初旬開始された難民救濟會は六月末迄に八千九百五十名で、而も其大多數は旅費の支給を受けて目的地たる鴨綠江の上流及其の他の背後地に赴いたと説明せられて居り、尙此の外救濟機關の保護を受けぬ徒歩北行者約二千名認め、柞蠶製糸工約一千五百名、而も安東の支那街には毎年四、五月頃より結氷期にかけて人口約一萬人を増加する傾向がある云ふからには、汽車に依る北行者を除いた數だけで、充分上陸者數と同程度の數は得られる譯である。之等の事情を綜合するに汽車北行者の大半は安東附近在住者であり、上陸者との關係は極めて薄く、寧ろ其數は滿洲内移住の現象を説明するものだとして然るべきだらう。

尙又同地々方事務所の回答に據れば、本年に入つてからは前記救濟所に收容せるものは僅に六十人に過ぎないに稱されてゐる。之は全く前年度末より安東、背後地方に跳梁を極めた大刀會の件があつて以來、官憲の難民に對する態度は一變して從來の保護政策を捨て取締を嚴重にせることが主要なる原因だらうと考へる。同時に本年上陸者の減少及其の減少にも拘らず、北行者に僅少なながらも前年度超過を見た事象を説明するものである。

第四款 奉 天

既に前年度編によつて述べられた如く奉天は大連、營口、安東方面から貨車、客車及徒歩により北行した出稼者

ミ京奉線による出稼者ミが落合ひ、更に東方撫順方面、北方長春方面に分散する十字路であり、移動の中心點であつて錯雜極まりない。従つて彼等の移動状態を窮める事は甚だ難事に屬する。殊に京奉線の輸送統計が不明であり、徒歩北行者及本線三等乗客者としての出稼者も知るに由なく、一層此感を強うせざるを得ない。

一、貨車輸送者數 先づ前掲(第三章第一節第一項)各海港貨車輸送統計の中から奉天驛着の數字を拾つて月別に表示するミ次の如くである。

各海港發奉天驛着出稼者月別統計

仕出驛	年 月 別		一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	計
	年	次							
大連	三二	三二	一、一六六	三、〇四一	二、〇八四	六、三三八	一、三六四	一、八五五	三、〇八六
營口	三二	三二	二、三〇三	二、〇七八	二、〇二〇	二、〇二〇	三、一五六	九、四一	三、三三九
安東	三二	三二	一、一	四、四三	七、五七	六、六六	八、六〇	三、六八	三、一七四
合 計	三二	三二	一、一六六	九、五〇三	三、一六八	二、七三五	九、六〇三	二、四九四	三、〇四二

註 本表數字は調査時報第八卷第九號數字を引用した。

即ち前年六三、四二一名、本年五一、〇二四名の出稼者が奉天に到着して居る。然し乍ら本年中には行先地不明の無賃輸送者一八、八一六の二一・七%にあたる數即ち四、〇八三を加算する(此の計算は本年の無賃輸送者は大連ばかりであつたので大連驛發の貨車輸送者の分布割合に依つた)五五、一〇七名となる。こゝらが貨車輸送による奉天驛下車の實際數だらうと思はれる。前年度約一萬餘の差違があるが、前年の數に於ては營口發に約二萬近い奉海鐵路使役苦力の團體輸送が行はれた如き特殊の事情に基く。

二、京奉線に依る出稼者 京奉線奉天驛下車數は、前掲(第二章第二節第四項)によつて明かなる如く、前年一三五、六二六に對し、本年一五〇、九〇〇にして約一萬五千の増加が認められる。此の他にも京奉線利用者として皇姑屯驛下車數約十萬四千程あることも同時に推定して置いた。京奉線利用者に關しては、何回も述べた様に輸送統計の缺如から何れも推定した數であつて、殊に皇姑屯驛下車數は根據に乏しいものであることを斷つたが、此に其の推定の大した見當違でないことを説明してみやうと思ふ。

奉天驛發奥地出稼苦力數は前年約十五萬人、本年約二十一萬二千名にして、之に奉海線利用者を後述の如く五萬五千とする、奉天より汽車に依つて奥地へ分散した數は十六萬七千名なる。此の數の中には、前述一旦奉天で下車した者の再移動、一時奉天地方に足を留めた徒歩到着者の奉天驛乗車も、勿論認めねばならない。又奉海線利用者を含めると、大連、營口よりの北行者が多數あることを認めねばならない。今之等の數の合計は大體に於て京奉線徒歩者に相殺し得られるものこそ考へる、強ち前記京奉線奉天驛下車數も事實に大なる懸隔は有り得ない。

い。以上を約めるに次の如き結果が得られる。

京奉線奉天驛下車數	一五〇、九〇〇人
同上皇姑屯驛下車數	一〇四、六六四
京奉線奉天驛着合計	二五五、五六四
滿鐵線奉天驛乗車數	二二二、九三一
奉海線奉天驛乗車數	五五、〇〇〇
乗車數合計	二六七、九三一

結局奉天附近に留る出稼者數は、海路方面からの貨車並に三等車に依つて到着する數、即ち六、七萬の見當ではないかと思ふ。

三、奉天驛發奥地出稼者の分布状態 奉天驛からの奥地分布も次表の示すが如く、長春五二%を占め首位に在り、一四%の撫順之に次ぎ、前年度の比較に於て稍々相違點が認められる。即ち長春前年約五五に對し、本年約五三に落ちたるに反し、撫順は前年一〇%に對し、約四・二%の比率増加があつたことである。併し乍ら總體の約八割強の員數は北行者之を占め、南行、東行の極めて尠ない比率に在ることは依然變りがない。

仕向驛別奉天驛發奧地出稼者數兩年度比較

仕向驛	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
鞍山	八八四	〇・五	二、三四三	一・〇
本溪	其他中に含まる	—	八、八二六	二・一
鐵嶺	七、一四五	四・八	一六、一九六	六・七
開原	一五、四八六	一〇・三	二〇、一五二	九・三
四平街	一四、四九八	九・七	一四、八八三	七・六
公主嶺	四、五五一	三・〇	六、二五二	二・八
長春	八二、四八六	五・四・九	一〇六、九七六	五二・九
撫順	一五、一三七	一〇・一	三三、一三四	一四・三
其他	一〇、〇一四	六・七	四、〇六九	三・五
合計	一五〇、二〇一	一〇〇・〇	二二二、九三一	一二八・三

註 一本表は調査時報第八卷第九號に依る。
 二 昭和三年合計欄の%は二年度合計に對する増加率を示す。
 三 二年度數字には一月分を含まず。

合計の數を見るに本年度二十一萬三千人にして、前年度の夫れを超過する事、約六萬二千人なるも前年度分には一月中の輸送者が計上されてゐないから、之を差引くと約四萬二千即ち約二八%の増加である。此の數は本年度京奉線到着者増加を説明する唯一の有力なる根據だを看做すことが出来る。
 四、客車に依る出稼者數 客車に依る出稼者に就いては奉天驛に於て毎年出稼期間中之を推算して居る。昭和二、三年度の六月迄の數は次の如くである。

營口、大連兩驛發奉天驛下車客車に依る出稼者數

月次	昭和二年		昭和三年	
	營口	大連	營口	大連
一月	一、二二二	一、五〇四	一、三〇四	九七三
二月	一、五九五	一、八一五	一、七四六	一、五二四
三月	一、六四〇	九九三	一、五六七	一、六六四
四月	一、二一九	七二〇	一、七四三	八五六
五月	一、二四七	六〇一	一、六六五	六五二
六月	六、九三三	五、六三三	一、四七七	八八九
合計	—	—	九、五〇二	六、五六七
計	—	—	—	一六、〇六九

註 一本表は奉天驛推定數である。

第三章 滿洲線主要驛分布状態

此の表には考慮すべき幾多の疑點がある。即ち第一に兩年度共營口の方が大連より多くなつて居る。ことである。多分之は大連、營口兩地間の種々の事情の相違に對する考慮を拂ふことなくして推算したのではないかと思はれる。第二に營口からの數は遼河の開河を見ぬ一、二、三の各月に於ても出稼期間に劣らぬ多數が輸送されて居るが或は安東方面と同様に附近在住者の移動又は出稼を認むべきものかも知れないが、それにしてもいくらか多きに過ぐる感がある。第三は前掲貨車輸送に對比するに營口に於て客車便乗者の二年度數は同數を凌駕し、三年度にも大した相違が認められぬことである。故に此數を此儘認容するに三等乗客車に徒歩者の推定に關する從來からの觀念を轉へすことなる。之等によつて見るに客車乗車出稼者の奉天到着數は大連、營口、安東の三地を合して一萬足らずとするが至當だと思惟せられる。

五、歸還苦力の奉天驛下車數 概して上半期は出稼期間なるを以つて歸還者の奉天驛下車數は次表の如く比較的少ない。

發驛別奉天驛者歸還苦力數

發驛別	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
撫順	二、〇八三	六・三	二、一三三	六・二
安東	九四	三	二七三	八

鐵道	昭和二年		昭和三年	
	員數	%	員數	%
鐵嶺	一一五	三	一四八	四
開原	七、〇九一	二一・三	二、五〇七	六・九
四平街	五二五	一・六	九四二	二・六
公主嶺	二、一七三	九・六	二、四一四	六・七
長春	二〇、〇八九	六〇・六	二七、六五四	七六・四
合計	三三、一七〇	一〇〇・〇	三六、一七六	一〇九・〇

註一 本表は調査時報第八卷第十號に依る。
 二 昭和三年度合計欄數字は二年度に對する増加率を示す。

右表の指示する發驛別比率は撫順の比較的少ないの開原の割合に多いのこの例外を除けば、大體に於て前記出稼者の比率一致することを説明してゐる。即ち歸還者も亦奉天には長春又は長春以北より到着する苦力が大多數であることが窺はれる。前年との比較は約九%の増加である。

此の奉天驛著の歸還者三萬三前掲奉天驛下車の出稼者並に徒歩者を合するに一月から六月末までの間に奉天を中心として集散した苦力は四十萬近い數に達するだらう。

六、歸還苦力の奉天驛乗車數 歸還者に對しては貨車輸送の便宜は計られてゐないから、出稼も客車に混入するを以て推定する以外に之を知る方法はない譯である。歸還者に對する奉天驛の推定數を表示するに次の如くである。

月次	仕向		昭和二年	昭和三年	昭和二年	昭和三年	昭和二年	昭和三年
	營	口						
一	六〇四	一、四六一	二、三二七	二、四一三	二九、四〇五	一五、四九〇		
二	四二九	一、一五六	八四〇	二、二〇八	一一、三二四	一四、二六三		
三	九二一	一、九四一	六一四	二、五三〇	一四、七五二	一五、七〇〇		
四	八四一	二、二〇三	三〇九	一、一一四	八、七三二	一二、九〇〇		
五		一、七六三		九七八		八、四〇一		
六		二、四八〇		一、四〇一		三、六三九		
計	二、七九五	一、一〇〇四	四、〇八〇	一〇、六四四	六四、二一三	七〇、三九三		

註一 本表は奉天驛發表の推定數である。

前年同様の根據の下に本年の推定が行はれたるに、前年に於て五、六月の推定は省略されてゐるに雖も、本年の増加は可成な數に達してゐるに、前年に對し此の數に見る如き歸還者の増加割合が、歸還時季まで繼續したるに殆んど前年及本年の移民の増加は山東に歸還せねばならぬ筈であるが、より確實な海港統計には斯くの如き割合の増加は認められなかつた。尙六月以降の數字を參考して掲ぐれば次の如し。

奉天驛歸還華工數

經路別	月次		七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
	大連	營口							
大連	三二	三二	一、五五	一、八六	一、九〇	二、三三	二、五七	二、三三	四、三二
營口	三二	三二	三、七三	四、八六	三、九六	五、五五	四、七六	一、二四〇	五、七六
京奉	三二	三二	七、五〇	二、九〇	九、二〇	三、〇八	三、九〇	一、七、一〇〇	四、〇、〇八
合計	三二	三二	三、八五	二、七三	一、四、九八	二、五、四九	三、六、四三	六、二、五五	五、四、七〇

註 昭和三年十二月分數字は上旬のみである。

第五款 撫順

本年は撫順に關する資料は皆無であつて唯當地到着數として前掲各項より經路別に次の如き數字が得られるに過ぎない。

汽車に依る出稼者撫順到着數

驛別	昭和二年		昭和三年		差引増減
	大連	營口	安東	奉天	
大連	二四、六三〇	一七、八二九	△	六、八〇一	
營口	二、一八八	三、八九二	△	一、七〇四	
安東	七三六	五八七	△	一四九	
奉天	一五、一三七	三三、二三四	△	一七、九九七	
計	四二、六九一	五五、五四二	△	一二、八五一	

註 △印は差引減を示す。

右表には尙大連、營口よりの三等乗客者及各経路よりの徒歩者が加算されてないから、結局本年度は六萬見當で前年よりは可成な増加があつたことが知られる。

第六款 長 春

一、長春到着數 前掲各表（第二章第二節各表）より長春驛到着數を拾ふて表示するに次の如くなる。

長春驛到着貨車並に三等客出稼者月別統計

仕出驛	年次		月						合計
	三二	三二	一	二	三	四	五	六	
大連	三二	三二	二、二五三	四、六三三	四、一六二	一、九〇五	四、六三九	三、一五七	八〇、四四九
營口	三二	三二	一、〇三三	一、九三三	四、〇九七	二、七四二	七、六〇〇	二、九二四	三〇、〇四七
貨車輸送計	三二	三二	二、三〇三	四、八四六	四、七二六	三、八八八	八、八八〇	六、〇八六	一一〇、四九六
安東	三二	三二	一、〇三三	一、九三三	四、〇九七	二、七四二	七、六〇〇	二、九二四	三〇、〇四七
奉天	三二	三二	一、〇三三	一、九三三	四、〇九七	二、七四二	七、六〇〇	二、九二四	三〇、〇四七
三等客出稼者計	三二	三二	四、六三三	二、一八八	三、〇三三	三、三三三	一、〇三三	七、六三三	八二、四六六
合計	三二	三二	六、九三六	四、〇三三	八、〇三三	六、六三三	一、〇三三	一、〇三三	一三〇、二四四

註 本表は調査時報第八卷第九號に依る。

即ち本年度は前年に比し、貨車輸送に依る者も、三等客としての輸送數も共に増加してゐる。之が比率を求め前に長春驛發表の有賃、無賃貨車で來集した數字を見るに、昭和二年度一六、八五九名、三年度一三〇、六二九名であつて、何れも右表貨車輸送數計よりは多くなつてゐる。此の相違は奉天に於て説明したと同様、行先地不明

の無賃輸送数が省れてゐたのに由るものである。

故に貨車輸送数の増加率を之等の加算されてゐない後者によつて求めるに一七%、客車輸送数は更に増加率高く二三%であつて、總計は前年一九七、一六九に對し、本年二三九、五五八にして約一九%の増加があつたことになる。

併し乍ら本數字には大連、營口及其他各驛發の客車に依る出稼者が含まれてゐないから、徒步者を除く、到着出稼者の總數ではないことに留意せねばならない。長春地方事務所の回答は昭和二年度客車出稼者の推定數約二十萬、本年一月乃至六月の推定數約十二萬とするも、本數から前記客車輸送數約十一萬三千を差引いて、大連、營口其他各地よりの長春到着數を見るに、僅に七千内外に止まり、餘りに過少の觀なきを得ない。一方北滿方面の出稼者は六月末迄の各地の情勢を綜合するに、四十萬を突破せることは、先づ誤り無きもの、如くである。此の間の矛盾を解決するものは未知數に在る長春到着の三等乗客としての出稼者及徒步者であらねばならない。

今假りに、大連、營口よりの貨車輸送數の長春到着比率を以て、三等客並に徒步北行者長春到着數推定の根據とし、推算するに次の如き數字が得られる。

大連より	八八、一四九
營口より	二二、一六二
奉天より（徒步者のみ）	一六、六〇〇

計

一二六、九二一

貨車輸送數と同率の移動があつたとするに、即ち徒步及三等客長春到着數は約十二萬七千である。之を前記貨車及客車に依る到着者に合算するに約三十六萬五千となる。然し北滿の數から歸納的に見れば此の數も實際數よりは尙少ない様である。

叙上長春到着者は城内約二千、附屬地約三千計五千名位の滯留者があつたを除き、殆んど北滿、吉林、敦化方面に向けて入込むだに云はれてゐる。

二、到着者の奥地分布状態 長春を通過して北上する數多の出稼者は荒地開拓を目的とし、農耕に従事するもの大半を占む、其の他は土工、下級食料品行商販賣等によつて生活を營む。吉林方面に入込むものは吉敦、吉海兩鐵道工事に従事するもの最多を占む。而して北滿移住者に吉敦方面行苦力との比は勿論確實なるところは判り難いが概略前者の百名に對して、後者二十名内外の割合であり、更に北滿未開地に赴く彼等の分布状態は黑龍江省（主として黑龍江道）二割五分、吉林省（依蘭道、濱江道、延吉道）七割五分位の見當だに稱されてゐる。此の比率によつて長春到着者の奥地分布數を窺ふに次の如き結果が得られる。

哈爾濱方面	三〇五、〇〇〇人
黑龍江省側	七六、二五〇
吉林省側	二二八、七五〇

吉林方面

吉敦、吉長方面

四五、〇〇〇

長春西北方

一五、〇〇〇

三、鐵道による出稼人の長春下車の割合 直魯兩省よりの出稼移民が昨年來特に北滿を目的とする傾向の現はれたことは既に前年度編に於て述べたところである。而も本年は一層此の傾向が著しかった。

各 驛 別	昭 和 二 年		昭 和 三 年	
	發 驛 總 數	長 春 到 著 數	發 驛 總 數	長 春 到 著 數
大 連	一六〇、七四三	八〇、四六三	一五九、五五二	八九、八三九
營 口	六五、二七六	三四、四〇七	五五、一一四	三六、〇二四
安 東	一〇、九九八	五、八八八	一一、〇四五	六、七一九
奉 天	一五〇、二〇一	八二、四八六	二二二、九三一	一〇六、九七八
合 計	三八七、二〇八	二〇三、二四四	四三八、六四二	二二九、五六〇
		%		%
		五〇		五六
		五三		六五
		五三		六一
		五五		五〇
		五三		五二

合計比率に於ては右の如く前年に比べ〇・二%の減少なるも奉天を除く各發驛比率は大連六%、營口一二%、安東八%の増加にして、夫々長春到著の著しかったことを説明してゐる。故に本表に含まれざる出稼者の大連、營口發三等乗車數及各經路よりの徒步者も斯くの如き比率によつて北滿に移住したませんか、本年度來の入滿者中北滿到著數は可成夥しき數なるべきである。

四、出稼者の生業狀態 出稼者の生業狀態に就いては長春地方事務所の回答は比較的詳しい。依つて之を其儘藉りて説明する。

出稼者中當地に滞留して一般勞働に従事するものは隨時隨處で傭はれ、就職は極めて容易である。而して其等の大部分は土工に従事し、他は貨物積却、運搬作業に従事するのである。尙大工、左官、石工、鑿工等の特殊技能を持つものもあるが、其の數は極めて少なく、且つ移動も少ない。土工は夏期繁忙期中は日傭賃四十錢乃至五十錢を以て毎日十一時間見當の勞働を強制せられるを一般とし、農繁期に入るや、農夫として附近村落に出稼くもの、北上して荒地開拓の手傳をなすものも亦尠くない。更に長春、寬城子兩驛の貨物積却に従事する苦力は斯業の性質上熟練を要する爲、賃銀率の如きも前者に比して稍々高く、日傭賃銀金六十錢乃至八十錢であつて作業時間は繁忙期十五時間、閑散期十一時間である。

五、長春貧民救濟會の救濟員數 既に前年度編に於て昭和三年四、五月の數に就いては詳細に發表せられて居たが設立後一箇年間（自昨年四月十六日至本年四月十六日）に救濟北上せしめたる數は一〇七、二三八名であつて此の數を目的地別に示す次の如くである。

吉林省 約六七、〇〇〇名

延吉道海林

三〇、〇〇〇人

濱江道同濱

一八、〇〇〇人

第四章 奥地分布状態

移民の奥地分布に關しては本年は特に吉林省の如き各縣別に落着者數の發表を見たるころあるも全般的ならざるを以て前年度との比較の關係もあり大體に於て前年度編の區劃に倣ひて滿洲を南北に二大別し、東支線及其の背後地を北滿、其他を南滿と見各々既存の鐵道を基幹として次の如き地域に區分して概説する事とした。

南 滿

- 一、奉海鐵道及開拓鐵道の背後地方
 - 二、四洮、洮昂沿線及其の背後地方
 - 三、京奉沿線及其の背後地方
 - 四、長春西方及西北地方
 - 五、吉長、吉敦沿線及其の背後地方
 - 六、鴨綠江流域地方
- ### 北 滿
- 一、東支東部沿線及其の背後地方
 - 二、東支西部沿線及其背後地方

- 三、松花江及黑龍江の沿岸地方
- 四、呼海沿線及其の背後地方

然して北滿に落着いた數は四十三萬にして、本年上半期中入滿全數七十二萬の約六〇%に當り、南滿は二十九萬にして約四〇%に當る。之を前年度編推定の北滿五七%、南滿四三%に比べると、北滿稍々其の比率を高くした。其原因は各地情報の綜合に據れば、主として東邊道一帶の刀匪事件の影響なるもの、如く考へられる。

併し乍ら從來より移民地としての北滿の持つ潜在力は到底南滿の比すべきところに非らずして、只交通の不便なること、山東よりの遠距離に在ること及先導者の尠ない等の事情に依り、既往に於ては概して陰蔽され勝であつた。既に今日南滿の農業が耕地面積の擴張の困難なることの爲に、漸次集約的に傾きつゝあるに觀れば、人口の密度尙稀薄にして、廣大なる可耕地を有する北滿に於て、漸年移民吸收率の高まりつゝあることは蓋し當然迫るべき階梯である。最早移民地としての南滿は下り坂に在り、遠からずして専ら山東省半島部地方の出稼者のみ季節的に吸收するに至るべきは、想像の能くすることである。換言すれば南滿の現状は北滿に比し、或る一部地方を除くれば、移民に對する重要性は極めて薄くなつたと稱すること出来る。故に本年度北滿の増加も寧ろ主因は後者の理由に在るのではないかと思ふ。

次に參考迄に滿洲植民研究者の權威シー・ウォルター・ヤング氏の區劃したる移民地帯並に此の地帯に對する民國十六年上半年期の移民分布數を示すことにする。

滿洲の移民地帯

一、南 滿	二十萬人	三二%
1、鴨綠江地帯	二五、〇〇〇人	
2、牡丹江上流地帯	一〇〇、〇〇〇	
3、混成的地方(他鐵道線の上方及其の沿線より開展せるもの、京奉線、南滿線、四洮線其の他)	七五、〇〇〇	
二、北 滿	四十三萬人	六八%
4、洮 南 地 帯	一五、〇〇〇	
5、嫩江上流地帯	三五、〇〇〇	
6、長春北部地帯	三五、〇〇〇	
7、東支鐵道西部地帯	六〇、〇〇〇	
8、同上 東部地帯	一二五、〇〇〇	
9、呼 蘭 河 地 帯	一〇、〇〇〇	
10、松花江下流地帯	一五〇、〇〇〇	

註 本數字の出所は多分前年度編推定の入滿總數に據つたのだうと思はれる。

入滿者全數を移民と見た點、即ち海港及南滿鐵道沿線の出稼者及都市勞働者、撫順炭坑等の鑛山勞働者を考慮しなかつた爲に、南滿移民地帯への分布數に解せない點が認められるが、其の區別に就ては敘へられるところが多し

第一節 南 滿

第一款 總 數

本年度の南滿落着者は入滿總數七十二萬より北滿移住者及出稼者數四十三萬を差引いた二十九萬であつて、入滿全數に對し約四〇%の比率である。

第二款 分布狀態

本年度南滿落着者二十九萬を地方別に表示するに次の如くである。

- 一、奉海鐵道及開拓鐵道の背後地方
 - 1、奉海鐵道に依るもの 五五、〇〇〇人
 - 2、開拓線に依るもの 四〇、〇〇〇
- 二、四洮、洮昂沿線地方
 - 1、五、〇〇〇
 - 2、一五、〇〇〇

- 三、京奉線沿線及其背後地方 一五、〇〇〇
- 四、長春西方及西北方地方 一五、〇〇〇
- 五、鴨綠江流域地方 一五、〇〇〇
- 合計 一六〇、〇〇〇

全滿落着數二十九萬から右地方別合計數十六萬を差引いた残りの十三萬の行方は全く窮明し難いが大連、奉天等の重要都市の都市勞働者を始し、滿鐵沿線の親族知己の倚頼者等を含むものである。

第一項 奉海鐵道及開拓鐵道背後地方

奉海鐵道が本年一月中旬より無賃輸送を實施（後掲難民無賃輸送辦法參照）したる結果として吉長、吉敦沿線及其背後地方移住者までも常線を利用した傾向が窺はれ、相當増加があつたことは想像出来る。開原地方より開拓鐵道を利用して進入するものに約四千名の減少を來せることも此の影響を蒙れるものと見て差支へあるまい。併し乍ら當地方定住者は、僅に奉海線延長工事用として若干の増加を傳へられたに過ぎず、刀匪の件もあり、之を考慮するに無賃輸送の影響は單に通過者を増加したに止まり、落着者は大體に於て前年度に大差なかつたこと認め前掲數字を推定した。吉林省の奉海線背後地方に當る濛江、樺甸、磐石の三縣合計約八、四〇〇に云ふ數字の發表があるが、其の他背後地方が不明なので、之を以て全般に互る推算の根據となすことは不可能である。次に海龍、掏鹿兩領事分館の回答を基本として當地方難民定着の概況を記述する。

一、奉海鐵道利用者 京奉線、奉天驛下車數の増加は、より高き増加率を示した滿鐵線北行數（第三章第一節參照）に據つて消化し盡されて居るのであるが、本年一月中旬より奉海鐵道が難民救護を謀り、老幼男女の別を問はず一様に無賃を以て輸送したことに依り從來の徒歩進入者が激減を來し、結局同線利用者も幾分増加を呈した様である。勿論輸送統計の缺如から確數は窺知し難いが、斷片的乍ら次に示す北山城子を發端として同地より各方面に分布移動した數字を前年度と比較掲上することに依つて此の間の消息を窺ふことにする。

昭和二年自一月至六月人員			昭和三年自一月至六月人員			比較増減		
男	女	計	男	女	計	男	女	計
三、九七〇	二、八一二	六、七八一	四、六〇〇	二、二〇〇	六、八〇〇	六八〇	△六一二	一九

註 △印は前年度に對する減少を示す。

之に據れば前年度に殆んど大差ない様であるが、奉海鐵道は前年六月頃は未だ北山城子方面までしか開通してゐなかつたのが、本年末に於いて朝陽鎮迄延長されたるを以て、前年度奥地出稼者の全部が北山城子邊で下車を餘儀なくさせられたに反し、本年は輝南、濛江、撫松及磐石方面への出稼者は鐵道の延長によつて當然朝陽鎮まで乗車するもの想像せられる。故に本年度の實際輸送數は上表北山城子に集散した數よりも遙に多い筈である。

二、分布状態 奉海線背後地方の出稼者分布の狀態に就ては各縣別男女別に領事館の回答を其儘引用して説明の具に供する。即ち

奉海線背後地方難民分布状態

地方別	昭和二年自一月至六月員數			昭和三年自一月至六月員數			比較増減		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
海龍縣海龍地方	40	50	90	40	50	90	△	△	△
” 北山城子地方	30	40	70	30	40	70	△	△	△
” 朝陽鎮地方	30	40	70	30	40	70	△	△	△
輝南縣地方	30	40	70	30	40	70	△	△	△
金川縣地方	30	40	70	30	40	70	△	△	△
柳河縣地方	30	40	70	30	40	70	△	△	△
合計	1,418	1,638	3,056	1,418	1,638	3,056	△	△	△

註 △印を附せるは前年に對する減少を示す。

右の如く背後地方定著者は前年に比べて一千二百餘名の増加なるも吉海線及奉海線の土工に多數苦力を要したるに比較し迅速なる耕作採取を要する墾業栽培の公許栽培があつたに基因するもの、如く觀察せられてゐる。尙本表には甚だしく男女の數の接近せること及前年度編の推定數に餘りに懸隔があり過ぎることを目を惹く、此點回答中に説明なき爲確かなことは言へないが、本年入滿者は前年に比し家族帯同の避難民が多かつたと言ふ一般的理由に所謂出稼者が略されて難民のみが計上されて居るのではないかと考へられる。

三、奉海鐵路運輸直魯難民免費辦法

- 第一條 本路は省署擴充拯救直魯難民辦法第七條ノ規定ニ遵照シ、凡ソ直魯難民ノ乗車ハ男女老幼ヲ論ゼズ一律ニ免費輸送スルモノトス。
- 第二條 難民ノ乗車驛ハ奉天撫順ノ兩驛ヲ限度トシ、到着驛ハ奉天ヨリ乗車ノ者ハ奉天以東ノ各驛トシ、撫順ヨリ乗車ノ者ハ撫順以東ノ各驛ヲ以テ限度トス。
- 第三條 難民ノ乗車ハ本路印製ノ難民乗車免費請求書ニヨリ難民收容所ハ難民出發ノトキ本路乗車各驛ニ至リ請求書ニ記載ノ上當該驛ニ提出スルモノトス。(請求書様式ハ別ニ之ヲ定ム)
- 第四條 當該驛長ハ請求書ニ接シタルトキ符合スルヤ否ヤヲ確メ免費ヲ發行シ難民ニ交附シテ乗車セシムルモノトス。
- 第五條 凡免費持用ノ難民ハ中途下車ヲ許サズ。
- 第六條 難民携帶ノ荷物等ハ自身携帶ヲ許シ、別ニ收費セズ。
- 第七條 車上或ハ到着驛ニ於テ車票驗收ノ際若シ難民ヲ冒充スル免費持用ノモノヲ發見シタルトキハ正規普通票價ヲ追徴スル外、三倍ノ罰金ヲ徵收ス。
- 第八條 免費持用乗車ノ難民ハ凡ベテ柵車ニ乗車スルモノトス。

難民乗車免費請求書様式

第四章 奥地分布状態

奉海鐵路難民乘車免票請求書

籍貫

姓

年

齡

乘車自 站至 站

乘車自 年 月 日 至 年 月 日

右列難民法

照發爲荷此致

驛長

〇〇〇難民收容所印

負債填發者印

中華民國 年 月 日

四、開拓鐵道利用者及分布狀態 該方面への難民分布數は前年度編に於ては拘鹿領事分館の調査に據り約二萬の數を推定せられて居るが、勿論此の中には奉海鐵道沿線、背後地進入者も含まれてゐる譯である。開拓鐵道利用者として、前年度編記載の數は四月二十二日より六月十五日迄の間に四千四百五十七人であるが、本年自四月至六月

間の輸送合計は六千六十九名であつて前年に比べて約一千五百の増加なるも、此の増加數は包括期間の相違によつて略々相殺さるべきである。更に從來鐵嶺、公主嶺、四平街等に比して異數であつたことは開原驛附近に於て此全數の消化力を持たない以上、之等の數の大部分は開拓鐵道及徒歩に依り奥地に入り込んだと認めて差支へない。茲に開原驛到着數を籍りて此の間の消息を窺ふに次の如きものがある。

仕出驛別開原驛到着難民數

仕出驛	月次		一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
	年次	次							
大連	三年	二年	四三	一、二六〇	五、八四四	二、五九	八〇	三〇八	二、二〇
營口	三年	二年	八〇	一、六五六	二、四九	八七	三三	空	五、五七
安東	三年	二年	三	三九	二六七	元二	二六七	三九	一、二二
奉天	三年	二年	三	三	八七	三六	一五二	四	六九八
合計	三年	二年	二七五	六、一四〇	七、七六〇	五、七九	三、〇八	二、三〇七	二四、三九

右の如く開原驛到着数は前年二八、二二九、本年二四、三四九にして尠からぬ減少を呈した。果して此の減少が奉海線無償輸送に依る影響か何かは奉天驛よりの難民到着数に却つて増加の現象が認められる以上、一概に断定は許されないが、多少の影響は免れなかつたらうと思ふ。

第二項 四洮、洮昂沿線及其背後地方

當沿線地方の特長として避難民に比べて極めて墾農の輸送数の多いことは、既に前年度編に於て述べられてあつた。同時に又移住開墾に關する官憲の計畫及契約等に關して詳細に記述し盡されてあつた。只本年の前年に比して異なるところは從來荒地開墾者としての農民に對してのみ運賃割引の特點が與へられて居たのが、本年よりは省著の難民救濟辦法が擴充されて洮昂線に於ける難民の輸送は男女の別なく無償とされたこと、從來當地方に入り込む主なる經路は唯四平街より四洮線及其の延長たる洮昂線があるに過ぎなかつたが昭和二年十一月より打通線の開通を見たるを以て京奉線に依る難民にして當地方及東支鐵道西部沿線並に其の背後地方への拂經として該線利用者の相當數あつたことである。而して本年度當地方定著數は一萬五六千名ではないかと思ふ。

一、四平街よりの乗車數 四洮鐵路營業課の調査に據れば次の如く昨年度に比して墾民に於て五五九〇名の減少があつたに反し、難民は却つて二、一四七名の増加であつて總數に於ては三四四三名の減少を呈した。

四平街驛乘車墾農及避難民數

年次別	四平街驛乘車員數		滿鐵と聯絡運賃割引開始以來六月迄取扱人員		合計
	墾農	避難民	墾農	避難民	
昭和二年一月—六月	一四、二五一	四九八	一、六〇五	三六	一六、三九〇
昭和三年一月—六月	九、六〇六	二、六八〇	六六〇	一	一二、九四七

註 滿鐵との聯絡運賃割引開始は昨年四月十五日なるを以て昨年度分中にはそれ以前の輸送數は計上されてない。

此の減少が打通線の開通に影響を蒙るものなることは容易に想像されることではあるが、一方滿鐵線四平街下車の出稼者數を調べるに、次表の如く何等減少の事實は認められない。

仕出驛別四平街驛下車出稼者數

仕出驛	月次						計
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	
大連	五	一五	一六	四三	三二	四	二、七五
營口	一	二	二五	三六	一〇	二七	九〇
安東	一	四	一〇	四	三	三	二五
合計	七	二一	五一	八三	四五	三四	二、七五

第六條 難民は一人に付き行李農具工具等大人八十公斤を以て限度とし小人は四十公斤を限度として免費を許す
第七條 難民携帯の荷物は衣服及旅行身週用品を以て限度とし、若し貨物夾帶者あらば乗車人数に按じて三等客票を補購せしむる外三等票價によつて罰金を徴收し、該夾帶貨物は貨物私運辦法によつて辦理す。

第八條 車上或は到着驛に於て客票檢收の時若し難民を冒充し免票持用の者を發見したる場合は三等票價を補徴する外三倍の罰金を加ふ。

第九條 凡そ免票持用の乗車者は概ね棚車に乗せしむるものとす、但し人数少くして別に掛棚車の必要なときは普通三等客車に配通搭乗せしむるものとす

第十條 本規則は公布の日より施行す。

四、索倫山の再開墾計畫 最近東三省政府の計畫せる諸事業中、經濟的に見て最も注目し價するものは索倫山地方一帯に亘る荒地の再開墾事業である。出稼期間經過後の起案なる爲め、本年出稼者には何等の影響も及ぼさなかつたのであるが、勿論此の大計畫を實現せん爲には山東難民を盛に招來して、之に家屋、農具、種子、牛馬等を貸與して開墾に従事せしめねばならぬ譯で、新設乾安縣地方の開墾計畫と共に、將來當地方の難民及移住者の吸收率は劃期的に高まるのではあるまいかと思像される。

故に茲に其の概略を紹介することとする。

開墾すべき地域は黒龍省内の西南に位し、東部内蒙古、哲里木盟に從屬せる、札賚特旗と科爾沁右翼前後兩旗に

跨る、南北二千支里東西約千五百支里の一大荒蕪地であつて、此の廣大なる區域の開墾を成遂げ得た際には十五縣乃至二十縣を設置し得る見込で、此の開墾の爲には三箇年間、三千萬元と言ふ大資本を投下する豫定なりと謂ふ。

第三項 京奉沿線及其背後地

本年度京奉線よりの入滿者数の増加は既に第一章敘述の如く異數を示した。又増加の理由に就いて大體之を記載した。之等の理由に據れば京奉線に到着したのも前年度に比較すれば多少は増加しただらうと思像されるのである。之にても本年京奉線全線不通期間中相當の歸還者數（第三章第四項六參照）の有つた事實に徴してみれば當地方より北滿への出稼者として可成な數が出てゐることが窺知せらる程であるから、當地方の分布數は從來より問題とする程の數ではなかつたことは明瞭であり。次に記載する新民府、赤峰領事館及開魯からの回答に依つても此の間の消息は明瞭である。

一、新民府 新民府地方渡來數に就いては當驛に於いて下車する者七百餘名の外、奉天、營口方面より徒歩で移住し來れるものを合し總數約二千五百七十名にして、其の大部分は妻子を同伴するものである。之を昨年同期に於ける一、九八五人に對比すれば約七百五十名の増加を示した。而して本年度の渡來者二千七百五十名中其の約六割は農業に従事するものなるも、所謂農事日傭其の大部分を占め、往々野菜の栽培或は小作をなすものもあるも極めて小數に過ぎない。其他煙草、駄菓子の小賣商を營むもの約二百人、他は全部苦力にして油房、機房等比較的熟練を要する仕事は雇傭主に於いて餘り歓迎せられない關係上其數は勿論微々たるものである。

二、赤峰地方 赤峰地方に到着いたものは皆無にして、本年春頃、奥地に當る林西、巴林方面に赴く爲家族連の出稼者が約百名程通過したに過ぎない。それでも前年に比して多少の増加であると言はれてゐる。

三、開魯地方 同地方も亦六月中山東濟南地方の農民が林東方面の先住者の勸告によつて農耕従事の目的を以つて約百二三十名通過したこゝがあつたに過ぎない。

之等の報告によつて昨年度より幾分増加のあつたこゝを認むるこゝが出来たが京奉線は入滿及歸還経路として重きをなしてゐるが、同沿線及背後地は出稼者に對しては單に車窓外の平凡なる風景に止まり、全く關係を持たぬこゝが出来る。

第四項 長春西方及西北方地方

當地方向出稼者に關する資料としては前年同様唯一つ農安領事館の報告あるのみに過ぎない。該報告によれば當地方の到來者並に通過者は昨年比し稍々減少を見たるも、從來に比べて著しく家族同伴者が増加し、移住的傾向の一段加はつたこゝが目を惹いたと稱されてゐる。故に農安地方に到着いた約四千九百家族は前年同期の七千家族に比すれば約二千家族といふ著しき減少なるも、上述の理由によつて家族數を前年の三人に對し、本年を四人として計算すれば、本年は約一萬九千六百名にして約一千餘名の減少に過ぎない。此の内農安城内に到着いたものは約三百餘名であつて、大部は不定勞働者となつて職を求め、其の一部分は機械業、雜業等に従事したと見られてゐる。此の外に當地方を通過して松花江東南地方に去つた者約三萬二千内外が數へられて居るが之を前者と合算するに六

萬を超過し前年度推定數の倍額に達するが、東支南部線の輸送統計は近年著驛數より發驛數が超過の現象を呈して移住民の増加どころか、現住民の餘剩を他地方に向つて送り出して居るこゝ見られる故、此の點次掲の吉林省當局發表數字は難民に限られてゐる様であるが、北方しするに従ひ、難民の率は出稼者に比して高まるこゝは諸般の事情よりして察せられるに就き、之を倍加するこゝして、當地方落着者は約一萬五千位の見當であらう。

農安縣	六五五
長嶺縣	一、三四二
乾安縣	一、三三二
扶餘縣	七六五
石城縣	一、二四五
德惠縣	九三七
計	六、二六六

第五項 吉長、吉敦沿線及其背後地方

此の地方の出稼者數推定の標準ともなるべきものは吉長鐵道の輸送統計を以て他にない譯である。本年は此の統計が入つて居ない爲、其の推定に誤りなきを期し難いが、背後地各地への定住者に就いては比較的信頼に足る報告を得たので基準を之に置いて記述するこゝにした。

一、分布状態 此處に吉長、吉敦沿線及其の背後地方にして取扱ふ範圍は實際兩線の沿線並に背後地にあたる吉林、額穆、敦化、舒蘭、樺甸の諸縣の外、更に奥地に當る汪清、延吉、琿春、和龍の諸縣の所謂開島地方をも含むのである。本年一月乃至六月の前者を後者との定著数は大體に於いて各々一萬二三千名にして相半し合計約二萬五千名となる。之を縣別に示す次の如くである。

吉長、吉敦兩線の沿線並背後地	一一、六〇〇人
吉林縣	一、二〇〇人
舒蘭縣	一、六〇〇人
額穆縣	八〇〇人
樺甸縣	六、七〇〇人
敦化縣	二、二〇〇人
開島地方	一三、〇〇〇人
延吉縣	九、五〇〇人
汪清縣	一、〇〇〇人
琿春縣	一、〇〇〇人
和龍縣	一、五〇〇人

尤も此の数は一月より七月までの累計であるから此の間之等地方内の移動は勿論、更に北滿への遷移の相當數あることを認めねばならぬ。故に實際落着数は此の數を稍々低下するものと見なければならぬ。

當地方の難民吸收率が他地方に比して思つた程高くないことは事實は、既に前年度編に於いても記述せられて居る如く、吉林を中心とする地方も、開島地方も早く開けた土地であつて、開墾の容易なる地は既に先住者の占むるところとなり、餘すところは鬱蒼たる森林地帯か、さもなくば人跡絶えたる山嶽地帯なるに外ならない。故に比較的廣い未墾地を抱擁することにより鐵道敷設の計劃中より、新興の氣分旺盛であつた敦化地方を除けば、當地方にして集團的に難民を消化し得る地方は無い譯で、前記樺甸縣及延吉縣に多數の難民の計上せられたのも、特殊の事情の潜在せざる限り、同地方が徒歩北上者の通路に當る關係上一時的に腰を下した通過者までも加算されたのではないかと思像せられないでもないが、敦化方面の觀察も延吉縣には約五千の難民が赴いたことしてゐる。

二、到着總數 以上の各地分布數の合計が偶然にも前年度編に於いて吉長鐵路の輸送統計を基本として爲した演繹的觀察に依る、鐵路工夫を除く農業其他の職業に落着いた者二萬五六千人とした推定數と一致して居ることは全く吾人に奇異の感を抱かしむるの事象ではあるが、渡滿總數に大した開きを見なかつたことから推して有り得べからざることは無い、寧ろ前年度編々者の推定の正しきを證するに好き數字であると思ふ。即ち本年度當方落着者が大體に於いて前年度のそれと大差無かつたことが判る。同時に又前掲數字には鐵路工夫を含まざることも教へられる。尙後述各地の狀況等を考慮して本年度の當地方到着數並に通過數を推定する次の如き數字が得られる。

第一	各地方分布數	約二五、〇〇〇	第二	吉林難民收容所	一〇、〇〇〇
	鐵道使役苦力	約一三、〇〇〇		鐵道使役苦力	一七、〇〇〇
	通過者	約一〇、〇〇〇		敦化難民救濟會	一六、〇〇〇
	計	約四八、〇〇〇		其他	九、〇〇〇
				計	五二、〇〇〇

第二段の觀察に於ては内容に重複を認めねばならないが、大體に於て吉林方面に於て通過者數を過算してないから、之を相殺し得るものとす。第一、第二兩段の觀察も略相一致してゐる。之に依つて見るも、本年度吉長、吉敦沿線並に背後地方到着通過者の總數は約五萬と見て差支へ無いであらう。

三、吉林地方出稼狀況 吉林縣下は二百年前より開墾せられて今日に於いては殆んそ未耕地は認め得られないから、家族同伴の荒蕪地開墾者として當地に留まるものは皆無であつて、前掲數字は他地方への移動者だが、農業以外の職業に従事したものとみか、親族知己の依頼者みかを意味するものである。

本年四月迄の同地難民收容所の收容數は九千九百六十五名であつて昨年四、五兩月數三、四一五に比べるに多少増加があつたを見るべきであらう。之等收容所收容の難民の大部は官憲の斡旋で各地方の荒蕪地に移住せしめられ農耕に従事したが、一部は吉敦線工事及森林伐採夫に投じたを稱せられてゐる。

四、敦化地方出稼狀況 敦化方面到着の難民數は本年と前年とにより大なる相違が認められるが、之は吉敦線の

開通或は同線敷設工事進捗中漸次交通の至便となるに伴れて、難民は一旦敦化に集中されて地方に四散するものとなつたからであらうと思ふ。敦化駐在員の報告に隨へば本年度同地方の到着難民數は約二萬五千と推定され、山東會館臨時難民救濟所收容人員を月別に指示するに次の如くである。

	男	女	計
一	月	—	—
二	月	—	二、二五〇名
三	月	—	—
四	月	三、〇七八	二、四九九
五	月	二、七七一	五、五七七
六	月	二、一三九	一、六七一
計		七、九二八	四、三八二
		五、九一八	三、八八七
			一六、〇九六

右表には三月の記録を脱洩してゐるが此の他にも救濟所の存在を知らない難民も居るであらうし、又強いて救濟所の救濟を求めやうとせぬ出稼者もあるので之等を考慮の上前記當地方到着難民數二萬五千は推算せられた譯である。

同地方への移民は從來交通の不便であつたのに匪賊の横行甚だしき爲、極めて少かつたので目に立つ程難民が來住し初めたのは昨年五月以降のこゝであつて、前年七、八頃には可成な數の難民が到着して年末までには約五千

の難民が到着した様に傳へられてゐる。これにて臨時難民救濟會の設立せざる十月十五日以前に於いては移民數の記録全然なく推定の根據が無かつた譯だから正確を期し難いが一萬三四千の數は到來したゞらうと謂はれてゐる。之を前掲本年度到着數と比較するに本年は約倍加してゐるが、此の原因は前述の如く吉敦線の開通或は工事進捗中漸次交通の至便なるに連れて一旦敦化に集中し、其の後各地に四散する様になつたからだらうと思はれる。即ち前年五月より本年六月末までの當地方の難民到着總數は三萬五千乃至三萬八千であつて此の中半數以上は縣城到着後滞留することなく、若しくは暫時にして延吉、和龍、琿春、安圖各縣へ向け出發せるものであつて、其の割合は延吉最も多く和龍、琿春の順序で安圖縣最少なりと回答せられ、故に大體に於いて前記縣別分布數と似た觀察が爲されてゐる譯である。當地方來住者は悉く農業に従事し、小作農或は日雇勞働者として漸次自活の途を得つゝある。尙間島方面に關する分布狀況は叙上の如くであり、出稼狀況も大體に於いて前年同様變りないので此處には記述を省略する。

第六項 鴨綠江流域地帯

前述エス、ウォルター、ヤング氏は前項吉長、吉敦沿線及背後地方即ち牡丹江上流地帯と共に、當地方を南滿に於ける二個の重要な移民地帯と看做してゐる。實際に於て安東に近き流域地方は柞蠶飼育地を控へて早くより、柞蠶製絲業並に絹紬製織業地として世界的に著名な山東との間に季節勞働者の來往頻繁であつた爲、自然移住者も増へ、今日に於いては此の地方は比較的重要性を失くした様ではあるが、彼等先住者は奥地の處女地開拓に當り、

先導的立場に在り、其の任務を盡しつゝ、安東港上陸の難民、農業移民の誘致に貢獻してゐる。

ウォルター・ヤング氏は前年度の推定に於て當地方の落着數を安東港上陸者の全部即ち二萬四千と爲し、殘留者及汽車に依る北上者を全然認めて居らないが、當地方へ入込む經路は此の他に奉海線及吉長吉敦線があるので、同地方からの進入者を考慮すれば全體を通じて此の程度の移住者はあつたらうと思ふ。

然して本年は前述の如く（第三章第二節第三款參照）刀匪の發祥地であつて其の跋扈最も甚かつたことに依り安東上陸後目的地を變更して汽車に依り北上したのも相當あるので進入者は激減來し、約一萬五六千名の見當では無いかと考へる。尤も本編に於ては奉海、吉長、吉敦の二經路よりの進入者は同地方數に含めた關係上此の數は安東港上陸者のみの流域地方の落着數である。

第二節 北 滿

第一款 總 數

北滿移住の難民並に出稼者の前年度六月迄の推定は約三十六萬餘名とせられた。此の數は入滿總數推定の變化と共に當然改むべきなるも、比率の變化によつて大體之と同様なるべきことは既に述べた如くである。

尙昨年十月末まで東支鐵道輸送の三等乗客は二一一、二七二四等乗客は四八九、九六三で合計七〇一、一九〇で

ある。勿論三等乗客の全部は出稼者ではないが、之に年末までの輸送数を加へて此の中の約三割を難民に見ても、四等乗客を併せて五五二、三〇〇名位の難民及出稼者が輸送されたことなる。此の徒歩北上者上半期五萬（前年度推定數）下半期二萬計七萬の數を加算するに昭和二年度北滿出稼者數は約六十三萬の多きを示す。

翻て本年の北滿出稼狀況を観るに本春劈頭東支鐵道管理局に於いては前年の移民激増敍上の如くなるのみならず山東の事情は天災戰禍により住民の避難益々顯著なるべき傾向が窺はれたるに省み、本年の北滿移住者を約二百萬に豫定して輸送計畫を立たのであつた。之に歩調を共にすることに協定した各種保護救濟機關の積極的招致策は前年の南北滿洲の移住及出稼率に多大の變化を來しはしないかとの疑惑を抱かしむるものなるが、結局渡滿者も前年より大した相違を見ず、輸送計畫も各救濟機關相互の連絡を失したりして、充分具體化さずに終つて大した効果を擧げ得なかつたことも傳へられて居る關係上、其の増加の程度も主として北滿の經濟的誘引力の南滿に優れることに依り從來漸増的傾向にあつたこと及南滿に於ける例の刀匪事件に依る官憲の態度の冷淡なりしことが多少難民の北來を促進したと見るべきで、本年到着數は四十三萬乃至四十五萬の見當だとも考へる。即ち本年度北滿移住者は渡滿總數を七十二萬とすれば、約六〇%位に當り前年より七八%の増加である。

第二款 分布狀態

本年の分布狀態を瞭にする前に前年度北滿到來者に對する各所の分布推定數を列擧して本年度分布數推定の參考

とする。

地 方 別	前年度編々者推定數		推定數		東支鐵路局の調査	
	員 數	%	員 數	%	員 數	%
東 部 線 地 方	二〇〇,〇〇〇	五五・六	一二五,〇〇〇	二九・一	二六〇,〇〇〇	四一・三
西 部 線 地 方	一〇〇,〇〇〇	二七・八	六〇,〇〇〇	一四・〇	五〇,〇〇〇	七・九
哈 爾 濱 附 近	一〇,〇〇〇	二・八				
呼 蘭 河 地 帶	一〇,〇〇〇	二・八	一〇,〇〇〇	二・三	二〇,〇〇〇	三・二
松 花 江 下 流 地 帶	四〇,〇〇〇	一一・一	一五〇,〇〇〇	三四・九	二〇〇,〇〇〇	三一・七
洮 南 地 帶			一五,〇〇〇	三・五	一〇〇,〇〇〇	一五・九
嫩 江 上 流 地 帶			三五,〇〇〇	八・一		
長 春 北 部 地 帶			三五,〇〇〇	八・一		
計	三六〇,〇〇〇	一〇〇	四三〇,〇〇〇	一〇〇	六三〇,〇〇〇	

註 東支鐵路局調査數は一月より十月に至る期間の數である。

右に據れば三者の觀察は大體に於て傾向を同じうするもの、如くである。即ち第一段と第二段、三段に於て東部線と松花江下流地帯とに大なる開きがあることが認められる、之は第一段の東部線地方は松花江流域にあたる背後地方輸送者までも含むものなるが爲に、第二段との差七萬五千は當然松花江下流地帯に加算されるものと認むべきで

右表に見る昭和二年度分布比率東部線四一・三%西部線一九・六%は前年度編に於いて東支鐵道輸送統計に據つて爲した東部線二十に對し西部線十とした比率と殆んど變らない。故に本年度推定に當つても此の表の指示する六月迄の比率を採用するこゝは薄弱極まる根據ではあるが、先づ正確に近い數字が得られると斷定して差支あるまい。本年度六月までの分布比率は前年に比べるこゝ、西部線に三・二%の減少があつたに反し、東部線は四・五%の増加があつた。即ち本年度東支鐵道の東西兩部の比率は東部七三・六%に對し西部二六・四%となる。此の比率を以つて、吉林省當局の發表する六月迄の東部沿線並背後地方に當る地方定著數約三十二萬（實際の發表數は七月迄三九二、八九一なるも此の中から七月分數を、此の數が七月迄の月別報告數の累計なるを以つて、此の間に於ける重複者等を約二割見て扣除した）から北滿到來者の總數を算出するこゝ約四三五、〇〇〇人となる。此の數は前掲入滿總數からの推定數と殆んど一致する。故に此の數を採用して北滿各地の分布狀況を前掲表比率によつて割出すこゝの如くである。

- 一、東支鐵道東部沿線及背後地方 一九九、二三〇人
- 二、同上 西部沿線及背後地方 七一、三四〇
- 三、松花江下流地方（河運に依るもの） 四二、六三〇
- 四、哈爾濱及黑龍江各縣陸行者 一一一、八〇〇
- 合計 四三五、〇〇〇

尙此の數を款頭に示せる如き地方別に分布するこゝ次の如くである。

- 東支鐵道東部沿線並背後地方 一三四、五二五人
- 同上 西部線 同 七一、三四〇
- 松花江下流及黑龍江地方 一八五、四七五
- 呼海線沿線及背後地方 三一、八六〇
- 哈爾濱及其の附近地方 一一、八〇〇
- 合計 四三五、〇〇〇

本數の據て來る所以は以下各款に於て説明する。

第一項 東部沿線及其の背後地方

東部沿線及其背後地方の到來者は各地への分布數を知るに當つて約三四二、九〇〇なる數を擧げた。此の數の中には松花江流域吉林省側各縣への土著を目的とする難民及對岸の黑龍江省屬の通河、木蘭、陽原各縣一の移民も含まれてゐる譯であるから、純然たる東部沿線及背後地方の移民數とは稱するこゝが出来ない。次に東部沿線並に背後地方に當る各縣の難民數を列擧する。

縣名	員數	縣名	員數
賓江縣	一一、三六四	東寧縣	四、三三四

第四章 輿地分布狀態

勃利縣	一二、一六六	阿城縣	一、二〇二
饒河縣	二二、九八六	榆樹縣	八六一
同賓縣	五六二	五常縣	一、五〇六
珠河縣	六七八	虎林縣	三一、四二八
葦河縣	七四五	密山縣	三六、四一六
寧安縣	一、八九六	穆稜縣	七、四八一
合計	一三四、五二五人		

此表數字は吉林省當局發表の縣別數に根據したものであるが、何回も述べた様に該數字は各月報告の累計なるを以て重複數も相當含まれてゐるを認むべきで、之等を全體の二割に認めて算出したものである。即ち東部線沿線及背後地落着數は一三四・五二五人なる。

次に各縣別に分布數を見るに烏蘇里、穆稜の兩河流域地方の密山、虎林、饒河、穆稜の順位とし、三縣の合計は當地方難民到來數の約八五%の多きを占む。其の理由とするところは前年度編にも述べられた如く所謂密山大平野は土質甚だ良好、人口稀薄、地價低廉で多數の移民に取つては、最も魅惑的な目的地であるからであつて、つい最近までは移民の多くは一面坡を中心とする地方に定住したが、此の地方が先住者に占められてゐる今日では、集團的移民の適地は殆ど認められないらしく、隨つて前年來の急激の増加を來した移民及難民は穆稜河下流並に北方松花江流域の豐饒地に向つて殺到するの現象を呈するに至つたものである。

之に次ぐは勃利縣なるものには松花江の河運利用者も含むて居るを考へられる。東部線の最東部の國境を劃する東寧縣及寧安縣は前掲三縣同様、殆ど農業に従事するものであつて、僅に其の一部が山林業従事の勞働者として吸收されるに過ぎない。

哈爾濱附近及阿什河附近の農業に適する處は既に移民が充滿して居るを稱せられてゐる。故に同地方に吸收されるものは、多くは工業勞働者なるか、若くは季節的出稼者であつて、永住的移民としての色彩は極めて薄い。隨つて其の數も前記各縣の如く多數ではない。東支線の南部背後地に當る、五常、榆樹、阿城等の各縣は何れも一千名内外の移民を包容せるも、之等の大半は吉林、長春方面からの徒歩者を多數に含むものであり、北方に比すれば比較にならぬ少數である。

第二項 東支西部線及其背後地方

當地方の出稼者は前年度編に於いて約十萬を推定せられたが、本年度の落着數並に通過數は、各地の情報資料を綜合して視るに、東部線の吸收率が稍々高まつた關係上、前年に比して多少減少したを見るべきで、前掲七一、三四〇の推定數も大した見當違ひでは無いだらう。尙齊々哈爾公所の回答中同地方唯一の「トラクター」土地開墾業者にして石達火犁公司主露人「シリニコフ」氏の談に依れば、本年一月より六月頃迄に於ける南方より全黑龍江省内に移住の出稼人は約十五萬にしてゐるから本年の全數が一〇三、二〇〇名であることも、西部線利用者を前掲哈爾濱難民收容所數を基本とした七、一三四〇名としたことも先づ穩當なるものであらう。

然して西部線到着難民の分布に就ては推定の根據となるべき恰好な資料はないが、齊々哈爾以西の原始の儘に放任された荒蕪地が移民地として、難民を吸集するまでには、未だ相當の年數の經過を要するに稱せられるから、依然として安達、齊々哈爾當りの下車數が多いのではないかと想像せられるのである。

齊々哈爾公所の回答に據る西部線難民分布状況を窺ふに次の如くである。

一、齊々哈爾地方に到着し若くは通過せる數、支那側當局に就き取調たるも判明せず、出稼人の出入に關係ある地方農商家の區々なる言を綜合するに昨年より尠く大凡次の如く察せられる。

合計 五、六〇〇人

内 一、四〇〇人 當齊々哈爾省城及附近落着き。

四、二〇〇人 當地通過訥河、嫩江、克山方面に向ふ。

前年度の推定數龍口縣九千其他奧地三萬七千計四萬六千は相違が有り過ぎる。前述露人シリニコフ氏の觀察は本年度の數約五萬とせるに就き、打通線の開通に依る當地方北上者増加なごもあるから兩者の中備を探るにすれば二三萬の通過者並に移民があつたことなる。

尙同回答中には七月以降に入込んだ出稼者の中鐵道工事従業者に就いても次の如く記載せられて居る。

1、洮昂線昂齊間延長線の線路々基工事人夫

六月下旬より漸次入込み目下約二千六百人従業、該工事の請負者は天津善雅公司にして人夫は洮南、四平街、

奉天、天津等にて募集、大部分は山東、直隸よりの難民なりと云ふ。請負者は彼等を應募地の難民なりと云ふ。

請負者は彼等を應募地より工事現場迄大口に輸送する場合は支那鐵道より乗車賃半減の特典を受け、此の輸送中應募人夫に對しては二元乃至四元を食料雜費として給するのみ、而して工事現場に到着従業後は彼等の食住（食は一日四回高粱飯、包米麵製品、住は現場に安平堀建小屋）を請負者負擔し日々の勞銀は工事完了後支拂ふこと、して其の間必要に依り小遣錢位を支給すること。

2、齊克線々路々基工事人夫

七月中旬より漸次入込み目下約二千人従業、該工事は奉天振華公司の請負に係り更に其の下請として玉昌公司、華東公司等あり、聞くところによれば約六、七千人の人夫を使用する豫定にて現在従業の人夫は從來土工に従事し居りしものを南滿方面に於いて募集したるものにて難民は無いことなるが、洮昂延長線工事人夫の例に見て幾分難民の含まれ居ること、察せられる。

二、安達地方の狀況（安達通信摘録） 當地到着の出稼人は山東人のみなり、出稼人の爲當地に於いて主として活動せるは商務會にして同會は彼等を各地に添狀を附け各々一團として發足せしめたり。當地に落着きたる數は殆どなく左記の通り奧地に向へり。

青 崗 縣 一五〇名

肇東、肇州兩縣

二〇〇名

嫩 嶺 甸 子 一〇〇名

拜 泉 縣

三〇〇名

民國十七年の滿洲出稼者

100

克山鎮	200名	明水縣	150名
三道鎮	100名	安達縣	200名
計	1,400名	右は小兒を含む。	

本年は昨年比し當地通過のもの約三割多し。

此の數字は殆ど收容所取扱の難民のみを記載するものと認め差支へあるまい。安達を中心とする地方は北滿中でも最も地味肥沃なる地を占め、豊饒なる穀物産地にして、既に著名にして哈爾濱から安達を通過して齊々哈爾濱に至る直通道路を徒歩にて移動すれば、途上容易に仕事を見出され、多數の到着者もよく消化されること謂はれて居るに見ても所謂出稼者の數の多數に在ることは想像出来る。

第三項 松花江下流及黑龍江地方

前掲松花江下流地方に到着數四二、六三〇名は前年度編掲載の哈爾濱埠頭乘降船客數の乗船超過數四〇、六四一よりは約二千名の増加にして大した相違ではないが之は輸送能力の然らしむるころであつて、本年北滿出稼者を最も多數に吸収した地方は、最も廣潤な土地を背後に控へ包容力の絶大なる當地方たることは否めない。各進入経路別に此の數を推定するに次の如くなる。

- 一、松花江河運に依るもの 四二、六三〇人
- 二、東支鐵道東部線に依るもの 六四、七〇五

113279

三、哈爾濱方面よりの徒歩者數

七八、一四〇

合 計

一八五、四七五

即ち當地方到着者數は約一八五、四七四にして北滿到着者の約四三%を占む。右の中東支鐵道に依るものは前掲東支東部線推定輸送數約一九九、二三〇から同線背後地定着數一三四、五二五を差引いた數であつて、哈爾濱方面からの徒歩者數七八、一四〇は前掲哈爾濱を中心として分けた東西兩部數中東部三二萬中より東部線輸送數一九九、二三〇及海運に依るもの四二、六三〇を差引いた數である。果して斯の如き觀察が至當であるかは如何かは、其の判斷に尙充分の考慮を必要とするも、次に示すが如く松花、黑龍兩江流域並に背後地方の吉林省側各縣の六月迄の到着數のみでも約十八萬の異數を示せるに依つて思ふに、哈爾濱よりの陸行者も可成同地方に吸収されてゐなければならぬと見たからである。

賓 縣	九五五名	同 江 縣	二六、九六七
方正 縣	三三、四〇二	綏 遠 縣	一七、四六五
依 蘭 縣	一六、七六二	室 淸 縣	二五、九九一
樺 川 縣	三〇、七四二	合 計	一七九、七八九
富 錦 縣	二七、五〇四		

第四項 呼海線及背後地方

既に當地を除く北滿各地への難民及出稼者の分布數が明瞭になれば、之等を北滿到來者總數から差引けば自ら呼

第四章 奥地分布状態

海沿線及背後地方の到來數が出て來る譯である。即ち其數は三一、八六〇名であるが此の數は又哈爾濱及黑龍省陸行數の中松花江下流地方落着數ミ哈爾濱殘留數(一一、八〇〇)ミ推定するを差引いた數であつて尙克山、嫩江、安達方面への徒歩者も含まつて居る。併し乍ら安達方面の經路を採つて當地方は落着するものも相當あるから結局之を相殺して考へるミ同數位は呼海線沿線及其背後地に當る克山、嫩江方面に消化されたミ認めて差支へあるまい。

然して當地方の落着數は前掲前年度の推定數からみても一萬五千乃至二萬見當を出でない。之に反し嫩江地方には前年三萬五千の數が吸収されたミ推定せられて居るに就き、結局當地方へ殘留したものは約二萬位であらう。前年度編に於ては極めて少數なるこゝを説いてあつたので、本年度の當地到來者は激増したかの如く思はれるが、それは前年度編に於て取扱はれた數字は總べて難民のみに關するものであつたからではないかと思ふ。

次に前年度編掲載の望奎縣直魯難民及職業概數を藉りて前掲哈爾濱來住難民統計表ミ比較して當地方の北滿到來者總數に對する比率を求めて見やう。

年 別	人 數	業 農 數 目	業 工 數 目	鐵 路 數 目
民 國 十 五 年	三、五七〇	六 成	一 成	二 成
民 國 十 六 年 五 月	六、四二八	五 成	二 成	三 成

即ち前五年五月迄に於いて望奎縣取扱難民數は六、四二八である。然るに哈爾濱避難民統計表によるミ呼海沿線

に行つた難民數は三月九二二、四月二、一三七で計三、〇五八で、五月以後の數字は不明なるも、四月同様の數があつたとしても約一千餘名も不足である。勿論望奎縣に來集した難民中には青山、滿溝、安達あたりからの北上者も含まれて居るであらうが、聊か多數に過ぎるの感なきを得ない。此の表にして若し誤りなきものミせば望奎縣は明に出稼者並に移民に對しては呼海線に於ける小哈爾濱の趣があり、此の地を中心ミして難民及出稼者は集散するものなるこゝを説明してゐる。故に前掲數に六月分を加算した數を約七千ミして呼海線到著の難民總數ミするミ前年度に呼海線の哈爾濱難民來住總數に對する比率は約八・九%である。併し乍ら本年は呼海沿線の比率は求め難くないが、前年度に比して稍々減少せるこゝは同表によつて明かである。故に八%ミして計算するミ三四、〇〇〇であつて、前掲當地落着數及經過數ミ略一致する。

齊々哈爾公所の回答中には呼海線延長工事人夫に對し次の如く記述せられて居る。

呼海線延長工事の模様は今之を詳にせないが、該工事は春末より起工し黑龍江省當局等の異動を他所にして普く工事を進め、土工は、最近既に完了せるもの、如く傳へられてゐる。本工事に恐らく最少限二千の人夫は入込み其の若干は難民を含めるこゝミ、察す。

第五章 歸還者數と移民の定着力

本章は前年度編第六章「本年出稼者の特長」の題下に於て取扱はれたるものなるも、本年出稼の動因（第七章第一節参照）は、殆ど前年に變ることなく、従つて前年に對し特記すべき特長は全く認められない。茲では單に過去に於ける出稼者數と歸還者數の對比によつて、出稼者の幾許が定着したかに就いてのみ考察を試みる。

滿洲に對する直魯兩省民の移動は、最近迄は寧ろ單に季節的運動の形に於て行はれ、新土地に對する永久的移住性の極めて微少なることを以つて、固有の特質を認むるもの、如く、此事實は春季に來り。秋季に去る渡鳥的な移動に依つて明白であつた。

然るに民國十五年の六十萬の出稼者を見、同十六年に於て約百二十萬近い異數の渡來者を迎へ、吃驚した吾人は引續き陸續として腕を盡くることを知らぬ泉の如き此の民族移動の流に對して啞然たらざるを得ないのである。而も一方歸還者數を確むるに入滿者數に於けるが如き、特に吾人の眼を惹く程の變化は認められない事實は、當に此の移動の潮流が、從來の季節的勢動より永久的移民へ質的に變化しつゝあることを説明するものである。斯の如き移動の性質の變化は北滿に横はる廣大なる荒地の開墾を初とし、滿蒙資源の開発に將來劃期的な結果を齎らす基因を爲すものであつて、今や此の移動の潮流は輕視すべからざるものにして、各方面の注意を喚起するに至つた。茲に於て此の移動の潮流中幾許の永住的素質を具へる移民が含まれてゐるかを確むることの必要を感じる。

第一 最近數年間の歸還數と移住者

先づ過去數年間の出稼數及歸還數を一應經由地別に表示し、之を比較することによつて、移住者數を求むることとする。

年次	經路別		大連		營口		安東		奉天		天		合計		差引増減	
	入滿數	員數	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%
大正十二年	一七〇,〇四	四〇・八	七、〇七	一九・七	四、五七	二・九	六、六八	二・四・六	三、五三	一・〇	三、五三	一・〇	一、七〇,〇四	四〇・八	—	—
大正十三年	一七〇,〇六	四〇・〇	六、六四	一九・四	三、六二	二・三	四、七五	二・八	三、〇四	一・〇	三、〇四	一・〇	一七〇,〇六	四〇・〇	—	—
大正十四年	二四、一六	四・七	六、六九	一九・七	四、七〇	一・九	三、六四	一・三	三、六四	一・三	三、六四	一・三	二四、一六	四・七	—	—
大正十五年	三〇、三三	五・〇	二、四、七	二二・一	四、二七	一・八	二、七〇	一・九	二、七〇	一・九	二、七〇	一・九	三〇、三三	五・〇	—	—
昭和二年	五九、四三	五・二	二、七、九	一九・五	六、五三	二・四	一、九、八	一、〇	一、〇、八	一、〇	一、〇、八	一、〇	五九、四三	五・二	—	—
昭和三年上半年	三三、七六	五・三	八、九、〇	二五・〇	三、七五	一・一	一、五〇	〇・五	一、五〇	〇・五	一、五〇	〇・五	三三、七六	五・三	—	—
合計	一、七〇、八四〇	四〇・三	六、七、五	一九・四	二、七、三	一・八	六、〇、五	二・三	三、〇、三	一・〇	三、〇、三	一・〇	一、七〇、八四〇	四〇・三	—	—

註 一、奉天經由數は歸還數と比較の關係上皇姑屯驛下車數及徒歩者を含めてない。
二、大連に於ける大正十五年以前の數に婦女子の計上が略されてゐるので實際數は之以上である。

年次	經由地		營口		安東		奉天		合計	差引増減	
	員數	%	員數	%	員數	%	員數	%		員數	%
大正十二年	三三,四四	四七・七	四〇,二二	四七・〇	五九,六三	三〇・八	六四,三二	三三・五	二六,六五		
大正十三年	二二,二四九	四八・七	二五,四〇	五五・八	四四,九二	一九・三	三三,八〇	一六・三	三三,七〇	△六四,〇〇	△三三・三
大正十四年	二〇,六二	四八・〇	二五,七二	五二・一	三三,四三	二一・九	四九,九二	三三・〇	三三,四七	△二八,一五	△七・八
大正十五年	二二,五七	四七・六	二五,三二	五五・五	二〇,六二	六・九	九五,八三	三三・〇	二九,三三	△四,八四	△九・五
昭和二年	二二,八五九	四七・七	二六,八四	五八・八	二〇,四四	六・六	一〇七,七二	三三・九	三三,〇二	一七,六九	△六・六
昭和三年度	六六,二四	四七・六	一七,〇八	二〇・八	七,八六	五・三	五八,三三	三三・三	一八,元二		
昭和三年度上半期	六三,三四	四七・六	三三,〇三	四一・九	一九,三三	三〇・〇	四三,〇九	三三・六	一,四九八,八三		
計											

註 一、安東の推定苦力數は乗船全數の七〇%とす。營口の推定苦力數は乗船全數の七五%とす。

二、△印は差引減を示す。

右二表に於いて何れも京奉線關係の皇姑屯驛下車及徒歩者の推定數を省略したが計算の根據は記述の如く、大正十五年前の大連上陸出稼者數に婦女子が加算してないだけで、他は全然同様なるものである。故に年別増減比較に現れた増減率は大體に於いて誤り無いと謂へる。即ち出稼者の増加率は從來に於いても高まりつゝあつたが、昭和二年度は遂に前年に對し約八〇%の異常の増加を呈した、之に反し歸還者は唯十五年度に八萬四千の増加があつたことに依り、比率を高めただけで、昭和二年度も約一萬二千といふ極めて僅少の増加を見たに過ぎない。

然して次に爲した前後二表の比較に依る相違は大體に於いて移住者に看做して差支へない。

年次	移入		離滿		差引	定着率
	員數	%	員數	%		
大正十二年	三九二,二八六	二八・六	二八六,七六五	一〇五,五二一	二六・九	
大正十三年	四二九,二五四	二二・三	二二二,七二〇	一九六,五三四	四五・八	
大正十四年	四九〇,一四二	二二・四	二二四,五四七	二七五,五九五	五六・二	
大正十五年	五九二,三四三	二二・九	二九九,三九二	二九二,九五二	四九・四	
昭和二年	一,〇六五,八六四	三一・七	三二七,〇一一	七四八,八五三	七〇・三	
昭和三年	五九六,六七八	一四・八	一四八,三八一	四四八,二九七	七五・一	
昭和三年上半期	三,五六六,五六七	一四・九	一,四九八,八一二	二,〇六七,七五五	五八・〇	
合計						

右表に見る如く入滿數の増加に正比例して移住者は遞増しつゝあることが窺はれるが、大正十五年に於ける出稼者の前年に對する増加は歸還者の増加によつて相殺せられて、却つて定着率に稍々低下を來したが、大體大正十五年前の定着者は入滿數の半數以下に在つたことが概言することが出来る。然るに昭和二年の入滿者の著増は、歸還者の増加に伴はざることに依り、定着者約七十五萬を算し、従前の定着者が三十萬以下に在つたに見れば、倍額以上に達した。尙、昭和三年度分を除外した過去五箇年間の合計移住數は百六十二萬の巨數に達し、一箇年平均三十二萬の移住者があつたことになる。

第六章 移民の増加と地方開拓状況

叙上に於いて昭和二年度より種々の事情に因り急激の増加を見た、直魯兩省民の滿洲に對する移動の潮流中には從來の季節勞働或は一時的出稼を目的とした出稼者の外に、未開地に向つて誘引されることの永住性純移民の群の夥しき數が含まれてゐることを發見し得た。之に伴れて當然吾人は彼等移民の到着によつて、其地の經濟界に如何なる影響があつたかに就て興味を喚起され、其の真相を確かめたい衝動に驅られる。又獨り出稼者及難民のみならず地方開拓の全般に互る状況を考究することは決して無益なことではない。併し乍ら此處では之等に關する研究の餘裕が與へられて無い許りか、既に前年度編（第八章移民の増加と經濟的影響）に斷つてあつた如く、難民到來によつて受くる影響の限界を窮めることすら周到な觀察と相當の時日の經過を要し、短時日の間に之が數的説明を與へるごいふが如きことは到底不可能の事に屬する。不幸にして本年蒐集の資料からも、單に奉天以南地方及南北滿洲を去る各鐵道幹線地方には、殆ど未墾地を剩さないことに依り、被傭を目的とする出稼者を除く移民は、悉く南滿に於ては、奉海、四洮、吉敦線地方、北滿に於ては東支線背後地方及松花、黑龍兩江地方等に流れ込み、自然之等の地方に從來よりは多少劃期的な開拓が見られつゝあるのではないかとの、極めて常識的な概略の想像を多少現實化する位の根據を見出し得るに過ぎなかつた。

此の點當課編纂の東三省農產物收穫高預想內發表の地方別作付面積は唯一の數的説明資料と稱することが出来

若此數にして信據し得べきものとすれば容易に難民の地方開拓状況の一般は窮知し得られる譯であるが、實際に於いて斯くの如き機微なる移動を推知し得る程の正確さは無い様である。茲に大正十四年を基本として最近三箇年の耕地面積の増加比率を求むれば次の如し。

最近四箇年間東三省耕地面積と其増加比率

地方別	大正十四年		大正十五年		昭和二年		昭和三年	
	耕地面積	%	耕地面積	%	耕地面積	%	耕地面積	%
奉天以南地方	一五、二六、四〇〇	100	一五、〇三、八〇〇	100.8	一六、〇二、六〇〇	105.5	一六、三〇、〇〇〇	106.2
京奉線地方	六、三〇、〇〇〇	100	四、八四、〇〇〇	91.7	五、八九、〇〇〇	91.6	六、六九、六〇〇	104.7
開原地方	八、九九、七〇〇	100	九、五三、七〇〇	108.5	九、八二、七〇〇	109.1	九、三〇、〇〇〇	103.9
奉海線地方	一、九六、七〇〇	100	三、二七、〇〇〇	165.3	三、一〇、二〇〇	155.9	三、五〇、〇〇〇	175.3
長・公地方	九、九七、〇〇〇	100	一〇、三三、〇〇〇	103.6	一一、三九、二〇〇	114.2	一〇、〇〇、〇〇〇	100.7
四洮線地方	七、三三、〇〇〇	100	六、三〇、七〇〇	87.2	七、〇八、〇〇〇	97.9	七、五〇、二〇〇	102.5
吉長線地方	六、四二、〇〇〇	100	六、七三、七〇〇	104.8	七、〇六、〇〇〇	109.9	七、二三、二〇〇	111.9
間島地方	二、四三、二〇〇	100	二、六二、一〇〇	107.8	二、五〇、〇〇〇	102.8	二、三三、〇〇〇	95.7
南滿地方計	六、六八、〇〇〇	100	六、二六、三〇〇	93.8	六、八四、〇〇〇	102.3	六、四九、七〇〇	97.2
東支南線地方	三、六二、〇〇〇	100	三、三三、八〇〇	92.2	三、三三、八〇〇	92.2	三、三三、八〇〇	92.2
哈爾濱管區	—	—	—	—	三、七八、〇〇〇	100.0	三、八〇、〇〇〇	106.1

東支東部	東支西部	呼海	松花江下流	北滿其他	北滿	合計
地方	地方	地方	地方	地方	地方	計
4,702,000	2,352,000	8,357,000	7,252,000	4,592,000	4,832,000	107,001,500
100	100	100	100	100	100	100
4,037,000	2,100,000	8,268,000	8,268,000	4,592,000	4,832,000	107,001,500
85.8	89.3	98.4	113.3	100.0	100.0	100.0
7,152,000	2,100,000	11,212,000	11,212,000	9,184,000	9,314,000	214,003,000
150.1	90.0	133.9	154.6	134.7	132.7	150.6
7,152,000	2,100,000	11,212,000	11,212,000	9,184,000	9,314,000	214,003,000
150.1	90.0	133.9	154.6	134.7	132.7	150.6
7,152,000	2,100,000	11,212,000	11,212,000	9,184,000	9,314,000	214,003,000
150.1	90.0	133.9	154.6	134.7	132.7	150.6

註 一、各年の%欄は大正十四年を100とした指數である。

一、地方別に於ける長公地方とは長春、公主嶺地方を云ふ。

右表作製の所以は唯前に前年度編に述べられた、到著移民の總てが直に理想的状態に置かれて全能力を發揮し得たものと思へず、全般から云へば彼等の生活を維持するだけの收穫を翌年度に於て活動し得べき準備が、先づ同年内に出来上つたといふ位に留るであらうこの觀察にヒントを得たものである。

然るに求むる昭和三年度の二年度に對する増加は大したものでなく、多數の難民の北滿に押寄せた、前年から北滿の耕地面積は一三、七八〇、六〇〇反云ふ異常の増加を示し、如何にも移住者の増加の影響の如く思惟せられるが、尙よく吟味すれば開墾面積一人當年一町歩(前年度編第八章参照)とするも、約二十萬の開墾能力者の難民に依る開墾面積は二十萬町歩であつて、之に自然増加を加算するにしても前掲數の如く多數では有り得ない。故に此の間の相違は推定者を異にするここに基因するを認むべきである。此の點全く此の表は役立たないが難民吸收率の

最も高き地方に概して面積の増加率高きこと位は窮知し得られないこともないので、ここに掲げておく。

難民地方開拓の總括的概況は叙上の如くであるが、各所の回答中には断片的に地方開拓事情に就き詳述せるものがあり何等かの参考となるところあるべきを思ひ一應左に列記することにした。

第一、南滿洲地方開拓狀況

1、奉海線沿線背後地 奉海線地方への出稼者は主として奉海線路基工事従事の目的なるを以つて、地方開拓事業として特記すべき程度のものなく、唯柳河縣の一部に於て山林原野の未耕地が約百五天地程彼等の手によつて開墾せられたる外、輝南地方に於て木材切出に従事したものがあつたものである。

2、開拓鐵道沿線 當地方は山又山の地勢なれども耕作可能の土地は悉く開墾し盡されて殆ど開拓の餘地は認められない、又出稼人の多くは時付時より收穫時迄の雇傭關係を結び雇主方に同居し居り、自作農者も既墾地を借受るに過ぎないから出稼人による地方開拓は先づ無いこと云つて差支へない。

3、京奉線背後地方 赤峰附近の記述しかないが、同地方は都會に近い比較的便利の地方に於ける一帯の沃土は殆ど開墾し盡され、剩すところは僅に砂丘その他礫礫不毛の地ばかりである。之に引代へ奥地には有望なる未耕地も可成存在してゐる。だが之等の地方は官憲の警備行届かず保護を受くること頗る困難にして馬賊の跳梁に任せ、其危害は免れない、出稼人にて之を悦ばざるは勿論にして、從て今後雖も出稼者に依る地方開拓は極めて困

難なることが想像せられる。

4、長春西北方地方 難民中には自作農を稱すべきもの殆どなく開拓面積等の算出は困難なれど、漸次地方開發には間接的に奇與する處尠くはない。

5、吉林を中心とする地方 吉林縣下にありては既に百年前より開墾せられ、今日に於ては未耕地は皆無の状態にして新に移民を迎へるだけの餘地がない。従つて這回の如きも縣下に落着いた難民及移民は悉無と稱されてゐる。當地方殊に吉敦沿線に於ては、鐵道工事以來將來に着目し、鮮支人の新移住者も激増し、沿線一帯活氣を呈し居るも何分沿線一帯は森林を包蔵する山嶽地帯なれば、直に着手し得る未墾地の如きは餘り大したものでないことは想像される。故に陸續として到來する難民に對し、農耕地たることの大きな期待は有ち得ない。

6、敦化地方 此の地方は松花江支流の牡丹江上流一帯の沃野を占め、長春、吉敦沿線中最も廣大なる未耕地を抱擁する地方で、移民に關し南滿中最も重要性ある地方だとして認められ現に官憲の開拓計畫と相俟つて將來目覺しき發展が期待されてゐる。敦化駐在員の報告に據れば同地方難民落着數の前年からの合計は約一萬五千にして彼等により開墾された畑地は一千二百畝(約八百六十町歩)に達したと云はれてゐる。

7、間島地方 當地方は朝鮮との接壤地にして早くより鮮人によつて開拓され難民の増加に依る地方開拓形迹は認められないといふ。

第二、北滿地方開拓狀況

北滿に於て最も急激に開拓を見つゝある地方は東支東部線北部背後地方なることは、已に移民難民の同地方到着數によつて指示されてゐる。然るに當地方の狀況に就て具體的又は概略的な叙述を援ける一つの資料さへ見當らなかつたことは遺憾の極みである。僅に東部線行難民の中森林伐採の爲各林場に赴いたもの約五千七百人、穆稜炭坑に二千四百人赴いた情報があるのみであつた。

次に示す齊々哈爾公所の回答も悉く西部線地方に關するものである。

1、齊々哈爾地方 齊々哈爾地方開拓に就いても當省當局に於てさへ不明なるを以て適確な資料は有り得る筈がない。該地公所は前記シリニコフ氏の談として昭和二年中渡來の出稼人に依る開墾地は龍江、依安、克山、甘南、布西、納河及嫩江各縣下の約三千畝、本年は略々同地方に於て約二千畝あつたことを指摘して回答に代へてゐる。尙「トラクター」に依る齊々哈爾背後地方の開墾に關する「シリニコフ」氏の談は地方開拓に關し面白き參考資料だと思はれるし、中に難民に關する記事もあるので次に抄記して示すことにした。

一、齊々哈爾地方の荒地開墾其他に就て

當地方荒地開墾は土地に依り勿論難易を免れないが、大體に於いて家畜に依るときは牛又は馬八頭二人にて一日五畝とされてゐる。然るに「トラクター」に依るときは同機一臺二人(交替)で一日九畝の地を開墾し得る、依つて「トラクター」一臺の能力は牛馬百四十四頭と三十六人の人力に匹敵する。

自分が(シリニコフ氏)故吳俊陞、張秘書長外より囑を受けて開墾しつゝあるは一畝十五元(單に荒地を起す

のみ)外に六元五角(整地)計二十一元五角の請負である。
 齊々哈爾省城北江沿(嫩江支流岸)北方の荒地は一畝に付き二、三年前三元内外、本年二十元内外のものであつて開墾後は百元以上に達してゐる。自分(シリニコフ氏)の計算では當地方で春季開墾の上直に小麥の如き高價穀類を耕作せば當年内に裕に其の年の投下資本を回収し得る。されば前記北江沿北方一帯は數年前迄殆んき耕地を見なかつたが、今日では殆んき開墾され、當時の面影を想起するだに困難を稱されるに至つた。吳督軍在世の時、時々は能く自分の建築を容れて土地を開墾し、張秘書長外部下の顯官等亦之に倣つたが、督軍没後は督軍自身の土地の開墾は勿論他の顯官連中の分も目下放擲の状態に在る。

最近自分の提案により此の事に就き關係者間に協議するところありしも恐らく繼續は困難なるべく、若し督軍健在なりせば督軍並に廣信公司是近く夫々一萬畝の新開墾地を得る筈であつた。此の間に於て最も意を強するは吉林永衡官銀號の甘南縣下に於ける事業繼續である。同號は前年一千五百畝を開墾し、本年は更に六千五百畝を開墾して此處に五間房百八十棟を建て南方よりの難民約二千を移し一移民部落を形つくつた。同號は彼等移民に對して一世帯主に付二千吊を月二分といふ高利率にて二年でも三年でも收穫に依つて返還し得る迄貸與する方法をとつて居る、同様の方法は廣信公司に於ても行はれてゐる。

而して吉林永衡官銀號の之迄に投じた資金は約二百五十萬元であつて近く開墾地を二萬畝に増加し家屋も續々建増しを爲す計畫である。自分は目下同號より五百畝を租借して居るが一箇年の租借料は一畝に付き穀類八斗であらう。自分の見る所では現在齊々哈爾背後地方の既墾地は全面積の約十分の三で之が南滿の如く開墾されるは尙今後十年の時日はかゝるであらう。

二、黑龍江省内の「トラクター」數之に依る前年及本年の開墾面積
 黑龍江省に於ける「トラクター」數は合計三十一にして此の中十八は「シリニコフ」の所有である。(「シリニコフ」氏は斯く云ふも黑龍江全省内には右の外にも有る筈だ)之等の「トラクター」に依つて開墾面積は次の如くである。

昨 年	開墾面積	土 地 所 有 者	所 在 地
	三、〇〇〇畝	吳 俊 陞	齊々哈爾省城北江沿外
	一、五〇〇畝	吉林永衡官銀號	甘南縣、甘井子
本 年	六、五〇〇畝	吉林永衡官銀號	甘南縣、甘井子
	三、一〇〇畝	廣 信 公 司	
	二、〇〇〇畝	張 秘 書 長	
	五〇〇畝	吳 俊 陞	齊々哈爾省城北江沿
	二五〇畝	黃 參 謀 長	
	二〇〇畝	張 財 政 廳 長	

一二〇响	吳泰來	龍江縣下
三五〇响	大興昌	”
一五〇响		訥河縣下
七〇〇响		嫩江縣下
二五〇响		克山郡下
八〇〇响	遼東公司	依安縣下
一五〇响		札蘭屯
合計一五、〇七〇响		

右克山依安縣下及札蘭屯以外の地は殆んど自分の手に依り開墾せられたり。

2、安達地方 從來の特産物は逐年高騰を辿つたことは農家の収入増加となり延いて荒地開墾を促進したが、労働者の勞銀高に累せられ一日開墾の土地にして再び放置されたものもある程で、奥地に於ける耕地の増加率は左程でないと思像される。比較的他より増加の大なるは依安、克山方面であらう。

尙西部線の背部地方に當る訥河附近では、多數の山東移民が曠原の乾草を焼いて着々開墾の歩を進めつゝある狀況が、特に同地方旅行者の眼を惹いたと稱されてゐる。西部線地方で此の方面の開拓が最も著しいことは各處の回答悉く一致せる様である。

第七章 山東直隸出稼事情

山東、直隸兩省民の滿洲移住増加の動機は、滿洲に於いては、從來からの移動の基礎的原因も云ふべき、移民地の人口の稀薄なること、廣大なる未開地の存在すること、交通の比較的便利なること、生命財産の維持比較的安全なること等に對し、更に過去十數年間に於て堆積せる先住者は巨數となり、自ら先導的任務を果しつゝあるの影響も、官憲の難民救護策等の移住獎勵的態度が彼等を誘引し、一方山東、直隸（主として山東省）に於ては、周知の如く連年の戰禍、土匪の炎禍、旱蝗害、苛劍誅求に加へて銅元の下落等、所有災厄に崇られ、彼等の故郷たる山東の地に安住出来なくなつたからである。茲には後者の動機を闡明し、同時に之に附帶して知らねばならぬ山東内部事情のみに就いて記述するに止める。然し乍ら本年と前年の事情に於て大した懸隔は認められないのであつて唯相違點として擧げられるものは民國十六年度西南部地方の旱蝗害は、其の前年に於ける同地方旱水害より一層熾烈を極め、而も本年（民國十七年）年初寒氣漸減と共に、同地方に戰禍の開かれんことを豫想され、次いで三月末より南軍北伐の鋒先が鋭化し、遂に同地方は擾亂の甚化した。新くの如き悲觀材料は日和見的に平和的に歸すべき日を期待せるに依り、永い間所有苛政災禍の脅威に堪へて來た省民をして、終に故山に對する望を放擲するに至らしめ、窮迫のドン底から逃れる者異數を示した。之等避難の群の大部は一先づ濟南に集中して、或は津浦線に依り、或は膠濟鐵路に依り、比較的安安全な地域に避難し、更に青島、芝罘、龍口等の各海港より滿洲に歩を向けた。

故に本年渡滿の難民なるものは同地方に於いて特に多數を占めたこと謂へる。
遺憾乍ら山東地方の戦況急轉以後事務局平定後の事情を詳細に説明する適當な材料は手許に無く、既に發表の遅延した今資料蒐集に努力を拂ふ道も有しない。依つて以下叙述の大部は當課發行調査時報第八卷第四號「山東省の滿洲出稼事情」を藉りたるものであつて、主として前年度編以後の記事及前年度編に盡されなかつた具體的事實の列擧である。

第一節 出稼者増加の原因

第一項 戦禍

民國十四年四月張宗昌が山東軍務督辦に就任以來、省内殊に西南部は寧日なき戦争の繼續狀態を呈し、戦争地帯諸縣の戦禍は筆舌を絶した。民國十六年十月濟寧縣に起つた兵災救濟會の陳情書に掲げられたる記事に依つても、其の被害の如何に甚だしかつたかを窺知し得られる。

- 一、物品の損害
- 1、騾馬牛驢の徴發 徴發の爲目下運輸杜絶し明年の耕種不能なる。
- 2、衣類夜具の徴發 村民は寢具なく貧富を論ぜず今に至るも棉衣を着する能はず。
- 3、糧食の徴發 村民の食料絶無となり、豚影鶏鳴なきに至る。

4、燃料の徴發 全村の樹木迄も悉く採伐する。

二、流離の状況

- 1、郷民は兵影を見ざるも銃聲を聞いて奔竄し、婦女の路上食を乞ふもの、飢凍して斃る、者多く、軍隊の徴發せる家屋は家主の一物の携出を許さず、爲に孤身逃出して自盡する者すらある。
- 2、兵の過ぐる村は村民の寶物又坑中に貯藏するを疑ひ悉く家屋を破壊搜索する。
- 3、駐兵の村は村民悉く逃避する。

尙試に戦禍の最も甚だしかつた各縣名人口耕地面積を掲ぐれば次の如くである。

山東省戦禍區域統計

縣名	人口	耕地面積	牛	課	驢
濟寧	三八二千人	六六七千頃	八千頭	四千頭	一千四頭
金鄉	三三七	九三〇	二二三	五	三三
嘉祥	一五九	九一〇	二二三	五	三三
魚臺	二〇〇	九一〇	九	五	三三
野武	一、五〇〇	一、五六四	四	二	一七
鉅城	一七二	一、〇五〇	二一	一	二七

定	曹	單	鄆	觀	濮	荷	計
陶	縣	縣	城	城	縣	澤	
一六六	四二二	三三九	四〇一	七〇	四〇四	二九五	四、九三七
一四七	二、〇〇二	一、九七四	一、〇三〇	二九二	一、五七〇	一、五三二	一四、五六八
一五	四〇	四九	三一	六	三	三一	二六三
七	二〇	一〇	一七	三	一六	一五	一二〇
二六	七〇	六九	四八	二四	二一	五四	四四〇

即ち主たる戰禍區域のみを概算するも人口四百九十萬、耕地面積一千四百萬畝、家畜にては牛二十六萬頭、驟十二萬頭、驢四十四萬頭なる。

上記の陳情書及各縣地方より避難し來りたる土民の言にて該地方は縣城を除きたる村落には一木一草なく蕭條たる寒村に歸したり云ふに徴すれば、各縣の人民は殆ど他郷に逃竄し、家畜は掠奪され、田畑は荒廢の儘に放棄されてゐるものを見るべきである。眞に苛政虎よりも猛しの概あるを覺ゆるものである。

斯かる暴虐の慘たるものがある外に、張宗昌は從來の戰績に鑑み、備兵制度に代ふるに徴兵を以てせんし、之を全省に適用するに先ち膠東一帶の淄川、益都、昌樂、新光、掖縣、濰縣、高密、膠縣の十縣に實施せん計畫中であるが、從來も青年農民の強制募兵に就て恐慌を來してゐるので、此の計畫は更に民心に脅威を與ふるこ

ゝなり。従つて山東省民は直接又は間接に戰亂の影響を最も重大なる原因として此の難を避けんが爲安全地帯たる滿洲に移住せんとするものである。

第二項 匪 禍

内亂の連続は治安を顧みるに十分の餘暇を與へず、新に逃亡兵、地方無賴の徒が加はつて土匪の勢力は侮るべからざるものとなり、地方官憲の力及ばず跳梁を壇にして居る。而して之に依つて蒙る被害亦決して尠しきしない。次に匪賊頭目の主なるもの及兵力を概列すれば

頭目	根據地	人数
張華勝	鄆城縣内	一、〇〇〇名
夏得勝外二名	同	三〇〇
許冠軍外二名	鉅野縣内	一、〇〇〇
褚昭栗	同	一、三〇〇
王明三外五名	同	一、五〇〇
陳三木	濮城縣内	五〇〇
張五福	同	七〇〇
張金田外六名	荷澤縣内	二、〇〇〇
劉東双外八名	汶上縣内	八〇〇
張憲彬外五名	克縣内	一、〇〇〇

尤 大 財 主
李 興 安 (紅槍會)

新泰博山縣
汶 上 縣

一〇,〇〇〇
二〇,〇〇〇

等である。之に依るも匪徒の害は山東省の西部殊に西南部地方に甚しく濟寧道下の蒙陰、紋士、萊蕪、鉅野、諸縣は其の中心であり、従つて濟寧道下は戰禍に苦しめられつゝ、あると共に、匪禍に災されて居る譯で、産あるものは比較的治安の維持せられてゐる東部に避難し辛くも自活するか、然らざれば故郷を去つて滿洲に活路を求むるに至るのである。

第三項 稅 禍

昭和三年三月中山東に於ける諸兵力は干學忠軍一萬五千、舊褚玉樸軍五萬、孫傳芳軍四萬、山東軍十萬合計二十五萬五千にたり、之等の戰費は山東軍の分は勿論のこと其他にても山東省にて負擔せざるべからざるを以て、軍費捻出に所有手段を講じ省當局に先各軍の苛斂誅求は言語を絶してゐる。現在賦課しつゝ、ある主なる惡稅を左列するに次の如くである。

稅 目	實 施 期	稅 率	一箇年省收入見込額
貨物捐	民國十三年十月	鐵道運賃の百分の六十乃至八十	一、八〇〇,〇〇〇元
貨物稅	同 十五年九月	從價二分乃至二割	五、〇〇〇,〇〇〇
貨客加快費	同 年二月	十五噸貨車一輛に付五十元	一、七五〇,〇〇〇

河 工 捐	二 五 附 加 稅	紙 煙 捐	卷 煙 特 稅	煙 酒 稅	鑛 業 軍 事 特 捐	漁 航 船 捐	招 牌 稅	合 計
同	同	同	同	同	同	同	同	同
十月	十六年二月	十年八月	十三年十月	十五年七月	十六年十一月	同	九月	
鐵道運賃一割	二分五厘乃至五分	五萬本に付二元	三割		石炭一噸に付一元乃至四十仙		資本金の一分乃至五分	
八三〇,〇〇〇	一、七〇〇,〇〇〇	六〇〇,〇〇〇	二、五〇〇,〇〇〇	三五〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	不明	一五、五九〇,〇〇〇

其他本年に入つて實施せるものに房捐、民國十七年度丁漕領收等がある、又地方的に衛生費、地租附加稅等の名目にて賦課するものもあつて住民の困憊又想像に餘りある。例を濟南附近の農民に採るに、該地方一畝の年收は約九元五角内外なるに、之に對する地租其他の賦稅は一箇年七元五角にたり、一年の實收僅に二元見當なりと稱せられるを以て其全班を窺知すべきであらう。

第四項 天 災

山東地方視察者の談に據れば成程戰禍匪禍及苛斂誅求もないのではないが、それ等は黄河以南に於ける昨年の大旱魃と共に、折角耕作した穀物を全部蝗の大群に襲來されてしまつた結果として齎らされた黄河沿岸各地の見るを

忍びぬに比較すれば、未だ輕きに屬し、移民増加の直接原因は此處に在るに稱して居るによつても、其の被害の如何に甚だしかつたかを推知し得る。

尙華洋義賑會の調査に據れば昨年度洪水蝗害に依る災區面積五十六縣二十四萬方里、災民約二千萬人稱せられ之を山東省百七縣、人口三千八百萬に對すれば十分の六といふ巨數である。之等各地の天災狀況を表示すれば次の如くである。

山東省災況一覽(華洋義賑會山東分會調査)

縣名	全縣村數	被災村數	被災原因	昨年秋	縣名	全縣村數	被災村數	被災原因	昨年秋
禹城	九六	九六	旱蝗	一分未滿	平原	六九二	四〇	旱蝗	二分
長清	九六	九二	旱	同	臨沂	一、九六	一、〇九	旱	三分
武城	三三	一夫	旱蝗	同	濮陽	一、七四	二、〇〇	同	一分
冠縣	三〇	一夫	旱	同	日照	一、〇〇	六九	同	二分
觀城	一五	空	同	同	濰縣	一、〇〇	一、二四	同	三分
沂水	一、九七	一、四〇	同	同	范縣	五二	五四	同	一分
莒縣	二、四四	一、六〇	同	同	館陶	五〇	四二	同	一分未滿
蒙陰	七〇	五六	同	同	鉅野	一、三八	七七	同	同
鄆城	一、二九	八六	同	同	新泰	五〇	三七	同	同

單縣	二、五五	一、八四	同	同	德水	八二六	三三〇	旱蝗	三分
城武	一、〇〇	八六	同	同	泗水	五二九	六五	旱	同
曹縣	二、五五	二、〇五	同	同	平陰	五〇〇	六五	同	一分
滕平	一、六三	一、二〇	旱	四分	金鄉	一、〇〇	六九	同	同
清平	三三	八	旱	一分未滿	德平	八六	五五	旱蝗	二分
東平	九四	四三	同	二分	定陶	八六	五五	旱	二分
商河	四六	四三	旱	四分	陵陶	四六	二〇	同	二分
鄒城	一	八四	旱	三分	邱縣	三三	四	同	四分
臨邑	五三	五三	旱	二分	魚臺	一、三〇	三三	旱蝗	二分
齊河	五二	五九	同	同	恩縣	五八	六六	旱	三分
朝城	五七	五三	旱	同	鄒城	七六	三九	旱蝗	四分
萊蕪	九四	六九	同	三分	肥城	五九	三三	旱	一分
寧陽	六七	五三	旱	二分	濟寧	一、〇四	三三	旱蝗	三分
泰安	一、五〇	五〇	同	同	滋陽	四三	三三	同	四分
濟陽	八三	六九	旱	一分	夏津	四〇	三三	旱	同
陽穀	一、六八	五〇	同	同	曲阜	三三	三三	旱蝗	二分
聊城	八三	四〇	同	同	高唐	六六	一九	同	三分
東阿	七二	三三	同	同	嘉祥	三〇	四〇	旱	同

註 左表全縣村數は民國十一年山東勸業道調査に據る。

計 五六縣 四九、三六五村 被害村 三三、八七六 災民 二〇、八六〇、二二一人

尙參考の爲に華洋義賑會の金鄉、單、城武、滋陽、汶上、東平、沂、莒、膠、濰、嶧、費、蒙の十三縣災情調査報告（昨年十月調査）を抄譯すれば左の通りである。

イ、金鄉、單、城武（三縣の報告員は王甲山）

此の三縣は山東中でも最も災害の甚だしき地方で、十五年には大水害があり、低地は悉く沼澤化し、更に十六年には旱天続きで夏季の収入が少しもなかつたのみならず、秋になつても未だ種蒔さへなかつた現状で、極度の飢渴に瀕せる村民たちは郷土を去る者多く、或は婦女を賣り、更に子女をも食料ミ化せしめ、現在では住民は以前の僅かに三、四割も残つてゐない。而も残留災民は山に樹皮を削り、野に草根をあさり、それさへ今は盡き果て、蘇武ではないが、雪に毛を混じたもの更に腐敗せる棉なきを食し僅に露命をつなぎ、二三日門を開けない家を怪んで中に押入つて見るに食なくしてミイラになり、モット悲惨なのは現在の苦を縮めんミ樑から下つた紐に細首を掛け、てゐるこゝが多い。

ロ、滋陽、汶上、東平（三縣の報告員孫效忠）

此の地方は連年水災に遭ひ加ふるに兵匪の跋扈甚だしく住民の苦難は言語に絶してゐる。救濟品も交通の阻害によつて運搬されず難民は多く樹皮草根にホンの少しばかりの麥粉を雜へて主食ミしてゐる。住宅は以前には土墻を

築き草の屋根で蓋はれてゐたが、十五年の大水で流されて以後は家らしい家は一軒も見當らず、大半は此の寒空に露天に吹き曝され、風雨を防ぐ穴中に住む者は幸福さへ見なされてゐる。衣服の如きは勿論ホロ／＼で衣服ミ名付けるのが口惜しい位のものばかりである。

ハ、濰、嶧、費、蒙（四縣報告員王紹齋）

此の地方は山東省内で第一の土匪の本場たるのみならず、十二年の臨城事件以來は世界的に土匪で有名である。臨棗鐵道の鄒島停車場を中心にして十數里の間に散在する大小百餘の村落はキレイに土匪の爲に焼き拂はれ、焼け残つた屋墻或は基石の各所に散點するを瞥見すれば心なき者は其の寂寥さに感なきを得ないであらう。加ふるに十六年六月には北伐軍の先鋒各地に轉戦し、荒蕩の地は更に激戦の巷ミ化し、村民の被害は益々重くなる一方であつた。食物は多く草根樹皮で落花生の皮を粉にしたものを雜ぜ、團子にして食するが、往々にして黴毒を含む草の若芽を食して死亡した者すらある。如斯現状であるが心ある村民は多く他郷に出稼ぎに出て、残留せる村民は婦女子を賣つたりして其の日を糊塗してゐる。甚だしきは銅貨五枚で一人の女子を賣買したミ言ふ話も傳へられ、中には口減らしミて子女を喜んで呉れるものも少くない。婦女が生活の爲めに肉を鬻ぐのは當地では公然ミなつてゐる。

ニ、沂、莒、膠（三縣報告員張立文）

最近膠から莒に赴く者はその途上必ず次の光景を見るであらう。身に弊衣を纏ひ肉落ちて眼ばかり鋭い蒼白の面の持主たちが大道に沿ふて東北へ／＼ミ點々ミ續く男女老幼各種の人達である。老婆を小車に乗せて押す者、轉び

乍ら之に随ふ妻子、背に繩で小兒を結びつけた婦人、父に手を引かれた子供、生に疲れて一語だに發する者がない陰惨限りなき光景である。勿論彼等は郷土に住ひ兼ねて他地に移住する難民共である。日に一萬からの難民が東北へへ道に續くことも珍らしくない云ふ。調査によれば移住出来るものは少しでも蓄へがある者で、尙幸福者に屬する。動くにも動かれないで唯死を待つばかりの村民が非常に多く一村の中餓死者が少くも四五名は出る有様で此のまゝの現状が続けば數月ならずして此の地方は全滅の外あるまい、衣食住が絶えた上に土匪は益々猖獗し各縣城も日暮からはピタリ人通りが絶え、冬の田舎は物凄程に淋しいそうである。

第五項 銅元の下落

以上の他に増加の原因として銅元の下落、山東省銀行鈔票の下落云ふ事實も數へねばならない。

銅元の極端なる下落は全省を通じての現象にして、民國十一年當時現大洋一元に對して四吊文見當なりしものが最近では七吊文臺になつてゐる。試に急激に下落傾向を示せる相場の一例として龍口に於ける一昨年末より一箇年間の現大洋一元對同地銅元月別高低相場を掲ぐれば次の如くである。

月 別	最 高	最 低	月 別	最 高	最 低
民國十五年十一月	五・八二	五・六六	二月	六・二四	六・〇八
同 十二月	五・九八	五・七六	同 三月	六・六六	六・二四
同 十六年一月	六・〇八	五・九六	同 四月	七・〇三	六・六四

月 別	最 高	最 低	月 別	最 高	最 低
民國十六年五月	七・五四	六・九〇	同 九月	七・七二	七・三四
同 六月	七・二四	七・〇六	同 十月	七・五四	七・二二
同 七月	七・二八	七・〇八	同 十一月	七・四〇	五・七二
同 八月	七・六二	七・二四	同 十二月	七・八二	七・七二

此の事實は彼等の勞銀が多くの場合銅貨で支給せらるゝを以て、直に彼等の生活を脅威することになる。

山東省鈔票は同省機關銀行たる山東省銀行より發行さるゝもので、現在發行額を省當局は約七百萬元と稱するも實は三千萬元以上にあるらしい。而して軍資捻出の必要上近年に於ては濫發に次ぐに濫發を以てせし爲漸次信用を失ひ、殊に昨年五月山東軍の徐州敗退後は萬一濟南失守の曉には全然反古同様なることが明かなりこの一般の恐慌より遂に額面の三割以下に暴落し、外縣の行使が全く拒絶されたるは勿論濟南市中に於ても民衆の嫌惡する處となつた。省銀行は市價引上策として昨年五月迄兌換を引受しも五月中旬よりは一人一日拾元と兌換を制限し、更に八月兌換を停止するに至り、濟南を中心とする山東財界は混亂極度に達し、其後九月に山東軍有利の戰報にて一時は九角迄恢復したるも年末より再び五角に暴落し、信用は全く失墜の状態に在る。

従つて物價は茲に三年中に著しく騰貴し、就中日常品たる麥粉製品、野菜等の食料品及薪炭、石油、燐寸等の燃料品は各六、七割より十割の暴騰を告げ、品質劣惡となり中流以下の住民に尠からざる脅威を與へた。

第二節 窮民の救済方法及滿洲出稼者の獎勵

第一款 窮民の救済方法

窮民の多くが前項に述べた如く、老幼婦女を伴ひ、喰ふに食なく、宿るに家なしといふ、悲惨の狀態に置かれてゐるからには、救済事業は先づ第一著に爲さるべきことであつて山東省の官民が此方面に對し比較的組織立てる救済方法を構じたことは蓋し當然である。

省官憲は昨年十月山東省平糶總處を設け姜寰を處長とし省内の左記慈善團體を糾合して救済方法の計畫を協議した。

團體名	代表者
萬國紅十字會山東支部	何春仁 張達忱
世界紅萬字會	何仲起 車百開
華洋義賑會山東分會	李徵五 苗星垣
悟善社	柴勒唐 孫寄雲
同善社	杜友棠 劉星五
慈善社	楊濟川 胡漸達
康流所	才子民 朱星甫

右各團體の協議の結果左の救済方法が構ぜらるゝこととなつた。

一、粥廠 先づ濟南に四粥廠（第一廠東關悟善社内、第二廠南關紅十字會内、第三廠大馬路大槐樹、第四廠東關慈善社内）を設け、昨年十二月五日より施飯を開始した。當時一日の施飯人員は第一廠四千六百人、第二廠四百人、第三廠三千五百人、第四廠七千七百人合計一萬八千人で一日所要紅梁額は四百石であつた。其後一月に又粥廠六箇所を増加した。粥廠には一箇處に大鍋約二十平均を設備し、混雜を防ぐ爲に施飯時間は毎日午前七時半より十時迄としたこと云ふに徴しても如何に一時難民が殺到したかを窮知することが出来た。尙奉化院は窮民中健康を害する者多きに省み、難民避瘟劑を調製して一週一回難民に飲ました。

二、窮民庇寒所 宿るに家なく放浪する窮民を收容する爲、アンペラ小舎を用意することとし、濟南の四百、博山の二百を主なるものとし各地に新設すること共に、青島埠頭の倉庫二棟、濰縣の舊兵營跡等の如き使用せざる建物等を以て充てたものもある。

三、義捐金の募集 昨年十二月より窮民救済義捐金の募集に着手し張宗昌、孫傳芳を始め有力者よりの寄附は總額約一萬五千元に達した。之と共に十一月十六日以降三日間濟南に於て募捐遊藝大會を開催して入場料を救民の資に充て、其他華洋義賑會は別に救済金四萬六千元を支出し被害各縣に左の如く分配した。一人當平均支給額は大人三吊文、小人二吊文であつた。

一縣三千元の分 濰縣、嶧縣、費縣、單縣、兗州、臨沂、冠縣、金鄉、臨清、蒙陰。

一縣二千元の分 平陰、莒縣、武城、東平、東阿、長清、汶上、肥城。
 尙華洋義賑會は民國十一年山東水災難民救済の爲め、以丁代賑の方法により窮民をして、山東省内の德州、東昌、禹城、武定、下窪、提子口等の自動車道路の建設に當らしめた例に倣ひ、今回も工事を起して救済に資せんし海外各地に約一百萬元の義捐金を募集するに共に、之を用ゐて濟南東北を流る、小清河を壩鑿して黄河に通ぜしむべき工事計畫中である。

註 小清河壩鑿計畫案は濟南城北五柳閣より洛口迄開鑿して黄河と結び黄河上下流の貨物を洛口より濟南に引かんとするもので小清河水面は海水面比較平時二四公尺、高高時二五公尺で之に對する黄河は平時二六公尺、最高時三十公尺である。此の案は目下米入技師タフト氏によりて計畫中であるが同氏は往年黄河下流安堵口修築の經驗者である。

四、糧食の買入及寄附 施米に充當すべき高粱は専ら滿洲より供給を仰ぐにこし、買入及寄附によるもの左の如きに達した。

年月別	穀種	數量	寄附	又	は	買入
民國一六、一〇	高粱	六、〇〇〇	山東平糶處特員を派し奉天より購入			
同 一一	同	三、〇〇〇	臨時粥廠奉天より購入、半金交附濟			
同 一二	同	七〇〇	北京悟善社寄附奉天三益棧より寄附			
同 一二	穀黍	一五〇	北京悟善社の營口貯藏品を寄附			
同 一二	高粱	一、〇〇〇	濟南紅十字會賑務督辦より送付、范、冠、東河、肥城、莘の等の五縣に二百石當發給			

民國一七、一	高粱、秣米	一、六九四 ^袋	營口山東同鄉會より寄附
同 二	高粱	三、〇〇〇	濟南著、泰安、曲阜、泗水、滋陽、濟寧、鄒、滕、嶧、の八縣に分配
同 二	同	九、五〇〇	滿洲より山東著、内六、五〇〇袋濟南卸之を左の如く分配す 德縣一、〇〇〇 博山一、〇〇〇 濟寧一、〇〇〇 臨沂一、〇〇〇 濰縣一、〇〇〇 禹城一、〇〇〇 沂水一、〇〇〇

註 石は山東斛とし一石は邦斗一石六斗とす。

斯くの如き高粱の移入を見たる爲、膠濟、津浦兩鐵道共高粱の運送は著しく増加を來した。試に膠濟鐵路青島發輸送額を例年と比較すれば左の如し。

民國十二年	四〇、七七六噸
民國十三年	一〇、八〇六
民國十四年	四九、〇七一
民國十五年	一六、九七一
民國十六年	九〇、三六九
民國十七年(一、二月中)	三六、一八〇

而して本年二月以降に於いて朱慶蘭將軍の或は北滿に或は直魯の地に難民救済に東奔西走するところあり、各地よりの救恤義捐金及雜穀の寄附のより著しかつたことは三四の斷片的情報によつても明かである。膠濟鐵路の如き

も右輸送に當り救済の意味にて運賃二割引（青島濟南間十五噸一車に付運賃百一元四角を九七元四角四仙に割引、但し内加工捐一割加算）するこゝに定め三月一日より實施した。

第二款 滿洲出稼の奨励

省當局の救民に力を致す叙上の如きものあるも到底現地救済手段のみでは間に合はず、山東省官憲は滿洲の難民招致策に相俟つて彼等の滿洲出稼或は移住に對し盛に奨励策を構じつゝある。次に蒐集資料中より二、三官憲の奨励策も云ふべきものを示すこゝにする。民國十六年十月十九日先づ膠濟鐵路局長趙藍田に左の電令があつた。

魯省比歲以來、災患頻にして民生凋敝す今夏旱蝗告侵し生計日に蹙る、今秋冬の交に當り、各縣人民膠濟火車により外省に赴き生を計らんむする者多し、困苦流離の情憫むべし、速に設法救済すべし、貴路は殊に小丁票車設けて援照辦理し、災民を利すべきなり、速日實行するに共に各縣に布告周知せしむべし云々。

此の命令に接した膠濟鐵路は第二十列車を苦力輸送専用列車とし十二月十日より實行せるが、二月下旬該列車は濟南のみにて滿員なる場合多き爲め、濟南發二三、七二、七四、三八の四列車に新に四等客車を五乃至十輛連結するこゝし、乗車賃は濟南發青島經由聯絡大連著迄大洋四元である。尙膠澳商埠局は青島に於ける出稼人收容の爲、同港倉庫二棟を提供し、聯絡切符を所持する苦力を無料宿泊せしめ、一日一萬五千人を收容してゐた。

然るに本春再び出稼時季に入るや、叙上諸般の事情の下に前後の顧慮なく唯生活を求むる一心にて渡滿する難民

は更に激増を呈した、茲に於いて山東軍、民兩長は吉、黑當局に對し、出關魯省民の旅費等に關しては何等かの方法を講じて負擔するが故に、墾地到着後の土地受領及住居に關しては吉、黑兩當局の協助を得たいと特電を發して依頼し、一方省署は難民救済會議を開いて捐款を募集して貧民の出關を資助するこゝを議定し、先づ林省長が筆頭に千元を捐俸して提倡に資するこゝろがあつた。尙難民移住に關し最盡力しつゝある山東賑務辦事處移民簡則を列擧して参考に附する。

山東賑務辦事處移民簡則

- 一、本處ハ山東官紳ノ請求ニ應シ糧石運送空車ヲ以テ災民ヲ東三省各縣區ニ輸送シ、生活ヲ營マシムル爲次ノ各條ニ依リ之ヲ辦理ス
- 一、災民ノ東三省ニ赴カント欲スル者ハ弊害ヲ防止ノ爲毎戶少クモ須ラク壯丁一名ヲ有シ、工作ニ從事シテ身家ヲ贍養シ得ルモノヲ以テ限度トシ、家族ナキモノハ概ネ移送セズ
- 一、移送セル災民ノ姓名、年齢、籍貫ハ須ラク各粥廠ヨリ『清冊』ヲ作製シ、本處ニ送り、以テ查核ニ備フ、此ノ『清冊』ハ三部作製シ、關係アル省縣ニ送付シテ存査ニ便ス
- 一、清冊送附後本處ヨリ人ヲ派遣シテ災民ノ人數ヲ調査シ、別ニ乘車標識ヲ發給シ以テ區別ヲ示ス、災民乘車後ノ飲食ハ本處ヨリ供給シ下車後赴ク處ハ其ノ自由ニ任スト雖モ惟ダ其目的地ハ先ツ聲明ノ上註冊ヲ要ス一定ノ往キ所ナキ者ハ本處ニ於テ安插ノ責任ヲ負フ

- 一、災民十戸ニ對シ十戸長一名ヲ設ケ、百戸ニ對シテハ百戸長ヲ置キ以テ秩序ノ紊亂ヲ負ハシム
- 一、災民毎戸ニ對シ本處ヨリ「遷移執照」一部ヲ發給シ永久ニ所持セシム遷移執照ノ様式ハ別ニ之ヲ定ム

山東賑務辦事處難民招待所簡則

- 一、本處ハ出關難民ノ旅費缺乏及食宿艱難ノ者ニ對シ、特ニ沿途ニ招待所ヲ設定シ次ノ各條ニ依リ之ヲ辦理ス
- 一、本處招待所ハ専ラ各處ニ經過スル難民ヲ招待シ其他乞丐流氓ニ對シテハ概ネ收留セズ
- 一、本處招待所ノ難民招待ハ、多クモ、一泊ニ食後其ノ出發ヲ命シ以テ擁塞ヲ免レシム
- 一、本處招待所ハ蕪棚、粥廠及沸湯ヲ準備シ以テ難民ノ食宿ニ備フ
- 一、各招待所ハ毎日食宿セル難民ノ姓名ヲ註冊スル外、並ニ難民ノ數目ヲ本處ニ報告セシメ存查ス。

第三節 膠濟、津浦兩鐵路及其他の出稼者取扱

第一款 膠濟鐵路の出稼者取扱

大正五年以來滿鐵、山東鐵路、大連汽船の三社三線連絡苦力取扱契約（大正四年十一月八日締結）に依り出稼者出週期に於いて特殊連絡扱を行つたが、内三線聯絡は大正十一年以後中止となり、山東、大汽二社の聯絡のみは引續き實行せるを見たるも、大正十五年は貨車の不足其他支那側の理由により一時停止した。然るに民國十六年十一

月一日より再び復活するこゝに、なり、四方驛以西より大連行の貧民に限り小工聯運票の取扱を開始した。

大正十二年以降の聯絡輸送人員は大連汽船調に依れば左の如くである。

年 度	濟南青島間	青島濟南間
大正十二年度	三、七〇三人	二八、二六八人
大正十三年度	三、九五一	二二、二九三
大正十四年度	一一、三二九	
大正十五年度	停止	停止
昭和二年度	一、四七〇	十一月より實施

聯絡輸送船は大汽、阿波共同、政記公司三社船とし青島大連間運賃を一人當り一元五角に協定せるも昭和二年十一月一日より一元八角に改定した。聯絡運輸方法は左の如くである。

- 一、聯絡乗車券は特に定めたる期間に指定驛にて支那人に限り發賣する。
- 二、聯絡切符は白色にて（甲）膠濟鐵路車票（乙）大連汽船々票の二片連續の儘乗客に交付し甲片は接續驛（青島又は大港）に於て集札し、乙片は汽船係員適宜之を集札する。小兒に對しては小兒の印を表面に押捺する。
- 三、本券の通用期間は發行の日共十日間とす。
- 四、十二歳以下半額、四歳以下を無賃とす。

五、賑捐及河工捐を免許す。

膠濟鐵路は右による運賃を普通運賃の四割引とする主要驛より青島迄の運賃左の如し。

驛名	割引運賃	驛名	割引運賃	驛名	割引運賃
濟南	二元二〇	周村	一元八〇	淄川	一元八〇
張店	一元六八	博山	一元九二	青州	一元四四
龍山	二元二〇	濰縣	一元一四	明水	二元〇四
坊子	一元〇八	普集	一元九八	王村	一元九二

第二款 津浦鐵路の出稼者取扱

津浦鐵路は從來から京奉線と聯絡して或る特定の期間内同線に依る滿洲出稼者の特別取扱を行つてゐた。其の取扱方法の概要としては

- 一、臨城、滕縣、兗州、泰安、濟南、禹城、平原、德州、連鎮、泊頭、滄州の十一驛より奉天、營口に到る普通慢車に出稼者には自ら行李、小包を携行して割引便乗せしむることとした。
- 二、遼河解氷後は各驛一齊に營口に至る者には一弗の割引を行ふこととした。
- 三、割引乗車券の發行期は概ね毎年三月十日より四月末日に至る二箇月間にして山東より滿洲に至る者に対して發行

賣し、又十一月一日より十一月末日迄の二箇月間は滿洲よりの歸來者に對して割引を行ふこと。

等の方法を探つたが昨年來軍事輸送の關係上貨車の不足其他の理由により中絶してゐた。

本年に入つてからは朱慶櫛氏の奔走により救恤品としての雜穀四萬石の滿洲より貨車輸送されたに就いて歸り空車を利用して四萬の難民を無賃にて輸送されたが如き臨機の特別取扱があつた。此の外三月中京奉鐵道と天津經由奉天向け連絡運輸方法を議定し三月十日より之が實行に移つた事實も傳へられてゐる。右の連絡運輸は賃銀割引に依るもので特別客車發車地點を津浦線濟南及滕縣兩驛とし奉天及天津行男客に對し左の割引を行ひ女客は其の半額とし六十歳以上の男女を無賃とする規定である。

區	規定三等賃銀	割引賃銀
濟南—奉天間	元 五・八五	七・七〇
濟南—天津間	元 四・二五	
滕縣—奉天間	元 九・三〇	九・九〇
滕縣—天津間	元 一・七五	
濟南—天津間	元 三・九〇	
滕縣—天津間	元 三・三〇	

右に對し膠濟鐵道の實施しつゝある連絡賃銀を見るに

區	割引賃銀
濟南—青島間	二元二〇

青 島——大 連 間

一・八〇

計

四・〇〇

即ち濟南大連間四元となり、之に大連奉天間の割引賃金三圓七十五錢を加ふれば大洋七元七十五仙（假に金銀平價とす）津浦線に比して奉天迄の賃金多額なるのみならず、汽車汽船との乗換並に船腹輻輳の爲め青島にて數日間の船待を要する等の不便があるので、少くも津浦線沿に近き地方の出稼者は天津廻りに依るもの多き結果を生じた

第三款 青島の客棧と出稼者及船會社との關係

青島に於ける客棧は合計三十二戸に達する。其の資本は普通二三百元より三四百元の小額であるが、第一流たる東華棧の二萬五千元、運送業を主とする悅來棧の三十萬元等の如き巨額なるものがある。各戸も部屋数は東華棧の五十以上なるを除けば二十室内外を普通とし店員も概ね十數名を常とする。

客棧は其客筋より見れば商人宿にして出稼者を兼ねるものに出稼者専門のものとの二つがある。又其方面より見れば鐵道及陸行客を主とするもの、海州、石臼所方面より戎克又は小蒸汽船客を主とする者の二つに分れる、次に青島の客棧を例示すれば左の通りである。

イ、商人宿にして出稼者宿を兼ねるとの

△〇高 陞 棧 △中 華 棧 △〇裕 豐 棧 △悅 來 棧 △連 陞 棧

△〇三 勝 棧 △泰 安 棧 △泰 和 棧 △〇三 義 泰 〇華 興 公

△〇東 興 棧

ロ、出稼者専門のもの

〇豐 順 棧 〇豐 泰 棧 〇豐 順 泰 〇三 義 棧 〇天 寶 棧
〇裕 順 棧 △〇福 順 棧 〇福 永 棧 △連 興 棧 △〇悅 來 東
〇裕 仁 棧 〇同 順 成 〇順 發 棧 △〇東 華 棧 〇泰 發 棧
〇益 泰 棧 〇義 昌 棧 〇雙 興 棧

註 △印は汽車及陸筋客取扱店、〇印は戎克小蒸汽船客取扱店を現はす。

上記の客棧は鐵道沿線各地及海州、石臼所等の内地海港に出張員を派遣し又は分店を置き、特に移動期には客引を沿線を去る百支里以上の奥地に入込みしめ出稼者の募集勧誘を爲し、彼等を行先地迄連絡輸送し、恰も補助機關たるの觀がある。此の場合客引には旅費實費店持にて俸給十五元乃至八元を支給する。之と共に陸路入市する者を引く爲各客棧總計百名以上の客引が市中を馳驅する。奥地にて苦力が客引に附けば沿線又は内地港の聯絡客棧に入り出稼地迄一人當り幾何ミ請負一定の料金を支拂ひ荷札同様の客棧符號入りの札を胸に添綴されると共に、目的地迄は客引に絶対委任し、其の指圖に従ひ牛馬の群の如く引卒されて青島の客棧に到着する。普通客引一人の客引數は多きは三十名少きは五名位で客棧主より前記給料の外募集人員數により口錢を支給される。

青島の客棧は何れも七八百人を收容し得る設備があり、出稼者は安平を敷きたる土間同様の板敷の上に收容され十六疊大の部屋に四十人以上を起臥せしめ、客棧より湯水を支給するのみで食事は各自持である。宿料は一人一日

二角を常とする。

出稼者は全部客棧を経て大連又は安東行汽船に便乗し、自身に乗船の撰擇權なきことは荷物同様の立場にある。客棧は出稼者の乗船運賃に就き船會社と商議する。此の場合既述の大汽乗船の連絡切符所持者は青島大連間賃銀一人一元八角と規定されてあるからこれに依るも、其他の船會社間には出稼者吸集競争の競争が烈しく行はれる。昨年より本年一、二月の如く未曾有の出廻があつた時は船腹の需要供給の關係上船會社に非常なる強味があり、一人當り二元といふが如き相當高率なる運賃にて妥協輸送することあるも、一旦出廻り少なきか又は安東縣航路に従事する小型船舶が結氷期に入れば苦力積取に不定期に來航し、或は出廻期に於ける社外船の就航等のこゝがあつて船舶輻輳の場合には船會社間に激甚なる競争行はれ、大正十三年四月の如きは一人當五角臺の低落を見たこゝがある。従つて客棧は運賃高の場合には出稼者運賃の單價を低廉ならしむる爲其の船の收容定員以上を乗船せしむる等の如き其他船會社と出稼者の間にありて種々な不正暴利を貪るものが多い。殊に大正十三年には其弊甚しく批難の聲喧しきに至つたから同年九月青島の既掲客棧二十二戸は左記條件にて公會を設立し内外共信用を維振せんとした結果、客棧對船會社間の關係も次第に圓滑となり不正の點も幾何か矯正されるに至つたが、收容人員以上の超過乗船は今尙甚しい。

青島客棧聯合公會規定

一、會費客棧一戸に付六元とす

一、各地船運賃を協定す

一、不正行爲ありし者は除名す

一、客棧發行の引換券に客棧公會の印なきものは無効とす

一、公會は引換證券一枚に銀二仙の口錢を徵收すること

これに依りて客棧協定運賃が左の如く決定されたが、右は概ね規準を示すもので實際には今尙暗々裡に出稼者吸收の爲に競争が行はれる關係上運賃の高低が甚しい。

青島大連間	一・八〇	青島上海間	四・〇〇	青島芝罘間	三・五〇
青島安東間	四・〇〇	青島營口間	四・〇〇	青島威海衛間	二・〇〇

第四節 滿洲出稼者の出身地

本年度出稼者の出身地の變化の概略は既述南滿三港着、青島、芝罘、龍口、天津及京奉鐵道等の出關數及出稼者増加の原因を究めるこゝに依つて略々見當は附け得る、即ち本年も大體に於て前年度と傾向を同じうし半島部に比し西部地方が主要増加地域であるこゝは想像がつくのである。だが前年度編の抽象的記述を多少補ふべきものかあつたので之を藉りて説明に資すこゝとする。

第一類 青島出廻苦力出身地

青島經由の滿洲出稼苦力の出身地は内部各地方の安寧、作況、其他事情に依りて年に依つて一様には云ひ難い、一方此の調査は甚だ困難であつて、船舶及鐵道の完全なる輸送統計が得られないこと、並に彼等の多數の陸行して青島に入市するものであるから正確な數字を擧げることには殆んど不可能と云ふべきである。依つて主として膠濟鐵道輸送統計及海關出入統計に據り、西方の事情を聴取して其の全體を綜合すれば次の如くである。

年 度	膠濟鐵路船車連絡 にて入市數	海州石臼所より 汽船入市數	内地海港より民船 入市推定數	徒步入市數	計
大正十二年	三、七〇三	一〇、四〇六	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	五四、一〇九
同 十三年	三、九五一	八、四五四	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	五二、四〇五
同 十四年	一一、三一九	五、九五七	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	五七、二七六
同 十五年	四〇、〇〇〇	一三、三〇三	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一一三、三〇三
昭和二年	五八、五六七	五四、六〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二二三、五六七

註 表中×印數字へ大正十五年全年及昭和二年十月迄は膠濟鐵道は船車連絡を實施せざりしに付其の數を推定す

然るに昭和三年度の數は膠濟鐵道會計處發表の三月分數字のみにても次の如く三萬を超えてゐる。

三月上旬 男女 一七、九二七・五（小兒半票）

三月中旬 同 八、〇八六
三月下旬 同 四、二一三・五
計 三〇、二二七

註 右表數には端數が計上されてゐるが小兒二人を大人一人として計算され居りと認むべきであらう、故に實際員數は此の數を超過する譯である。

而も一二兩月分數字は後記の如く計六七、五〇〇なるに依つても從來とは非常な相違である。

第一項 膠濟鐵道に依る各地方別出廻

膠濟鐵道船車連絡に依る各乘車驛別の出稼者數を同鐵道統計に依りて左掲すれば左の通りである。

驛 名	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和二年十二月	昭和三年二月
南 泉 莊				四五・五	一八
李 哥 州				一一三	二二三
膠 州				六七三	一一五
芝 蘭 莊				三六・五	五
姚 哥 莊				一一六	一一一
高 密 莊				一一三九	六二〇・五
蔡 家 莊				八五	六三

註 昭和二、三年度の數字の端數は前註同様と看做すべきであらう。

尙上表に據り膠濟鐵路にて青島に出廻る船車連絡出稼者の主要乗車地別比率を求むるに

驛名	大正十二年		大正十三年		大正十四年		昭和二年十二月		昭和三年二月	
	出稼者	比率	出稼者	比率	出稼者	比率	出稼者	比率	出稼者	比率
濟南	六三・〇	六三・〇%	五六・〇	五六・〇%	四五・〇	四五・〇%	三九・〇	三九・〇%	五七・〇	五七・〇%
博山	六・五	六・五%	〇・九	〇・九%	〇・七	〇・七%	三四・〇	三四・〇%	二五・〇	二五・〇%
張店	三・三	三・三%	少數	少數	二・〇	二・〇%	〇・七	〇・七%	三・〇	三・〇%
王村	〇・六	〇・六%	同	同	六・〇	六・〇%	〇・六	〇・六%	〇・三	〇・三%
普集	九・五	九・五%	二・五	二・五%	二・〇	二・〇%	一・二	一・二%	〇・二	〇・二%
明水	三・八	三・八%	九	九%	一・〇	一・〇%	四・〇	四・〇%	〇・二	〇・二%
周村	二・七	二・七%	少數	少數	一	一%	〇・五	〇・五%	二・三	二・三%
其他十七驛	一〇・六	一〇・六%	九・一	九・一%	一一・三	一一・三%	二・〇	二・〇%	二・〇	二・〇%

右表の揭示する比率に於ては從來大した變化を見出し得ないが民國十一年頃迄の青島に集まる出稼者の郷里に就て調査せられたるものを見るに(青島守備軍民政部調山東の勞働者)

即墨、膠縣、高密、濰縣、萊陽、平度、昌邑、昌樂、壽光、益都、安邱、諸城、臨淄、廣饒、博山、恒臺、新泰、萊蕪、淄川、長山、鄒平、章邱、歷城、博興、臨朐、莒縣、沂水

の二十七縣なりと記されてゐる、右の調査には遺憾ながら各地方からの出稼數が示されてゐないから各縣から幾何の出稼者があるか判然しないが、上記の二十七縣を地域的に見るに歷城、恒臺、萊蕪、博山、淄川、沂水等の諸縣を除いては半島部地方に多く従つて青島の出稼者は大體半島部が過半數を占めてゐたものと見られるのであるが、十四年以降に於ては濟南、博山の乗車が急激に増加し、即ち半島部以西地方の出廻りに著しい變化を起したことを看取される。

第二項 海路青島に集る者

日照、諸城、費縣、莒州、沂水等の省南部の出稼者は陸路海州、石臼所等の海港に集まる。海州は江蘇省の北部東海岸にありて青島より百五十海里、石臼所は山東南部に位し青島を隔つるこゝ六十海里の所にある。西港に集まるものは汽船又は民船により青島に至り、滿洲行汽船切符を購ひ、乗船渡滿する。帆船により來集する出稼者數は一箇年二萬人に上るこゝ見るも大差なかるべく、汽船によるものは昨年度青島海關統計の示す處に據れば次の如くである。

仕向港別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
石臼所	五九	六七	三、六八	一、七七	六四	七五	五二	一、六七	二、八六	二、〇七	四、九七	四、三九	二〇、〇六
海州	五九	一、二五	五、六八	三、三三	二、二四	四七	四一	一、〇七	三、三六	二、〇六	三、四四	一、四七	二四、七〇

即ち汽船によりて青島に上陸したるもの約四萬五千人である。此數にも同様實際數の割増を要するものも二二%を約五四、四五〇云ふことになる。尤も海州、石臼所からは大連に直航するものも相當あるからには之等を考慮するに前年度に於ては六萬近い數が同地方から汽船によつて吐出されたを見るべきであらう。

第二款 芝罘

芝罘に集合する滿洲出稼者數を芝罘海關統計に徴するに

仕向港別	大正十二年		大正十三年		大正十四年		大正十五年		昭和二年	
	大	安	大	安	大	安	大	安	大	安
連東口	四八、五五六	三〇、七二二	五〇、〇九四	一七、七二七	四九、五〇七	二七、三五八	四六、二二九	二一、七三八	八〇、三三七	三六、九五四
計	二、九五五	八二、二二三	一、五〇一	七九、三二二	一、六七〇	七八、五三五	一、〇六六	六九、〇四三	九二三	一一八、二一四

即ち大正十二年以降の出稼者數を見るに唯だ昭和二年に四十九萬人を増加したただけで夫れまでは殆ど増加の跡は見られない。これを青島に於ける十五年以來の急激な増加率と對比すれば出稼民の急増した原因たる戰禍、匪禍、天災等の青島系地方に多かつたに對し、芝罘背後地方には此の現象の少なかつたことを證するものである。併しなから他地方の被つた戰禍、匪禍及天災の影響は、當地方には形を變へて甚だしき苛歛誅求となつて現はれた。之が

爲に下級民よりも寧ろ中流以上の民が、此の稅禍を免れんが爲滿洲に移住する者多きを加ふるに至つた。

芝罘に來集する滿洲出稼者の地方は蓬萊縣を南北に劃したる半島部東端各縣で左の通りである。

福山、文登、牟平、海陽、榮成、棲霞

第三款 龍口

龍口に集合する滿洲出稼者を同地海關統計に徴するに

港別	大正十二年		大正十三年		大正十四年		大正十五年		昭和二年	
	大	安	大	安	大	安	大	安	大	安
連東口	一八、九四二	二、五七四	二〇、一六二	二、九四〇	二〇、〇六六	三、三八八	一九、三九二	三、八九五	二二、八三四	四、〇九一
計	二五、四四八	四六、九六四	二二、〇七三	四五、一七六	一七、九六八	四一、四三二	三〇、七一〇	五三、九九七	推定數 六二、七九二	九一、五三三

即ち龍口も他の各地と同様大正十二年以來十四年迄は餘り増加して居らぬに反し、十五年には一萬二千人昭和二年には八千人の増加を示してゐる。尙上掲推定數は大連に従ひ二二%を加算したものである。

次に當地の背後地情況を見るに、當地來集者には左の二系統がある。

(一) 陸路來集するもの 蓬萊、掖、招遠、昌邑、濰縣の各地方

(二) 小清河流域民の半角溝を經由して來集するもの 齊東、濟河、博興、高宛、壽光、利津、蒲臺、廣饒、恒臺、章邱、青城各縣地方

此兩路來集者の情況を見るに、陸路徒歩にて龍口に出づる者は一日の宿泊料及食費を合し三百文を以て辦じ、假に濰縣より來るも三百餘支里を二日或は三日にて突破するを以て龍口一泊を加算して九百文を超過せざる豫算で十分である。次に小清河流域民の半角溝を経て龍口に來る者は民船に依るものであつて半角溝、龍口間には官有船の外に土人の對槽船を稱する民船があり、小清河沿岸に産する蒲草、葦、稻粟、粟稈、麥稈等の運送に當る。船型は水量少く河深、河幅共に小さきを以て百石積以下二萬斤積見當のもので、出廻期の日平均來往船は六十艘内外の由である。半角溝より出稼する者はこれに便乗するもの及び團體にて一雙を龍口迄十五元見當にて無切りみなす二方法がある。一箇年の龍口經由來往客は二、三千人に過ぎない様である。當地方も芝罘同様戰禍、天災等の被害區域には非ざるも苛斂誅求の爲比較的の生活に困窮せざるもの避難者が多かつた様である。營口上陸者の徒歩北行者の比較的少なかつた理由は此處に在るのではないかと考へる。

第四款 津浦線經由

津浦鐵道に搭乘する者は概ね西部山東省の出身者にして、沿線別に從ひ之を列舉すれば
嶧縣、滕縣、鄒城、臨沂、青城、歷城、魚臺、金鄉、單縣、曹縣、荷澤、蒙陰、嘉祥、汶上、鉅野、鄒城、定陶

東平、平陰、東阿、肥成、長清、泗水、曲阜、寧陽、泰安、滋陽、濟寧、城武
等の各縣は黃河江南に分布し

濟河、齊東、惠民、陽信、無棣、高唐、夏津、恩縣、德縣、德平、平原、陵縣、陽穀、范縣、濮縣、朝城、觀城
壽長、邱縣、武城、堂邑、樂陵、博平、清平、莘縣、冠縣、茌平、館陶、聊城、臨清、濟陽、濱縣、臨邑、齊化
商河、禹城

の各縣は黃河江北に分布する。

以上は單に津浦線近接地方にして此の地方民の大部は當然津浦線を利用するを便宜とするこの想像によつて分類列舉したに過ぎない。故に事情により必しも同上地方民でも膠濟鐵路其他に依る者の少からざるは勿論である例へば近年津浦鐵路が軍用の爲犠牲にせられ出稼者輸送に手が廻らなかつたに對し、膠濟鐵路は青島經由大連行の運賃割引を實施した結果、此地方民が濟南に集まり膠濟鐵路に依りて滿洲に出稼した如き其一例である。然らば山東省の滿洲出稼者の津浦鐵路に依りて滿洲に赴く者が幾何あるかは津浦線の輸送統計が不明である爲、其數を極めることは甚だ難事である。假に之を天津に來集する者から調べるも天津には津浦線の直隸南部及其他地方よりの出稼者が落合ふて、更に陸路京奉線に依る者も、海路營口等に赴く者に分散し、同地が移動の十字路を爲してゐるので益々錯雜してゐる。従つて茲には比較的明瞭になし得べき方面に就て概數を得る事とする。

其の方法に依つたものが左表であるが、之は昭和二年一月より十二月迄に京奉線に依りて奉天、皇姑屯に到着せ

るもの及び船路天津より營口に渡來したもの、合計である。右の外奉天に來集する京奉線系統には同線に沿ふて徒歩する者もあるが、彼等の總べては直隸民を看做して差支なかるべく次表には加算しなかつた。

營口上陸數(天津發のみ)	一四〇、四三四人
京 奉 線	三二七、六四五人
合 計	四六八、〇七九人

右の中直隸より約十萬の數が出發するに山東西部地方より津浦線を利用して滿洲に移住した數は年約三十七萬となる。

昭和四年五月五日印刷
昭和四年五月十日發行

南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課

編輯兼 發行人 佐 田 弘 治 郎

大連市近江町九十一番地

印刷人 山 田 浩 通

大連市近江町九十一番地

印刷所 東亞印刷株式會社大連支店

發行所 南滿洲鐵道株式會社

東京府

南新橋競走場大会場

競馬部

東京競馬場大会場大衆部

大正十一年四月十一日

競馬人

山田 啓

大正十一年四月十一日

競馬部

山田 啓

大正十一年四月十一日

東京府南新橋競走場
競馬部大衆部

